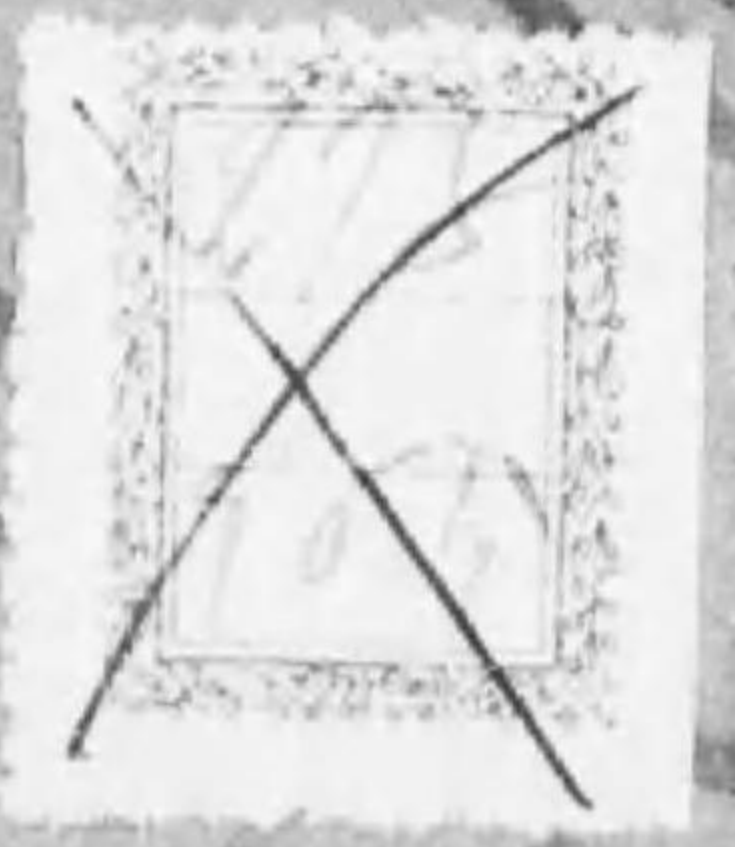
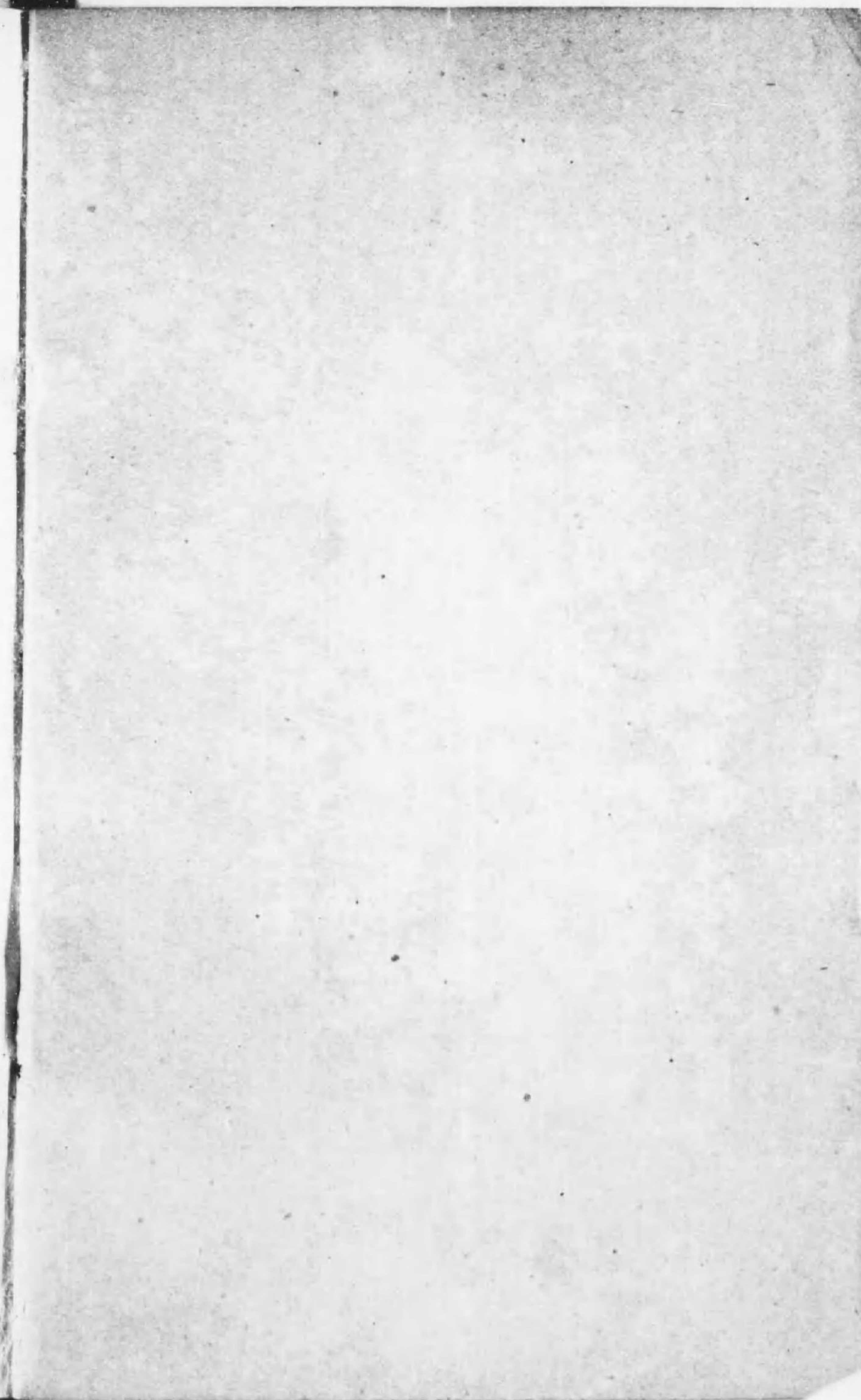


始



おへソの滑智大競争
宙返る







THE BIG "V" COMEDIES



V

持110
56



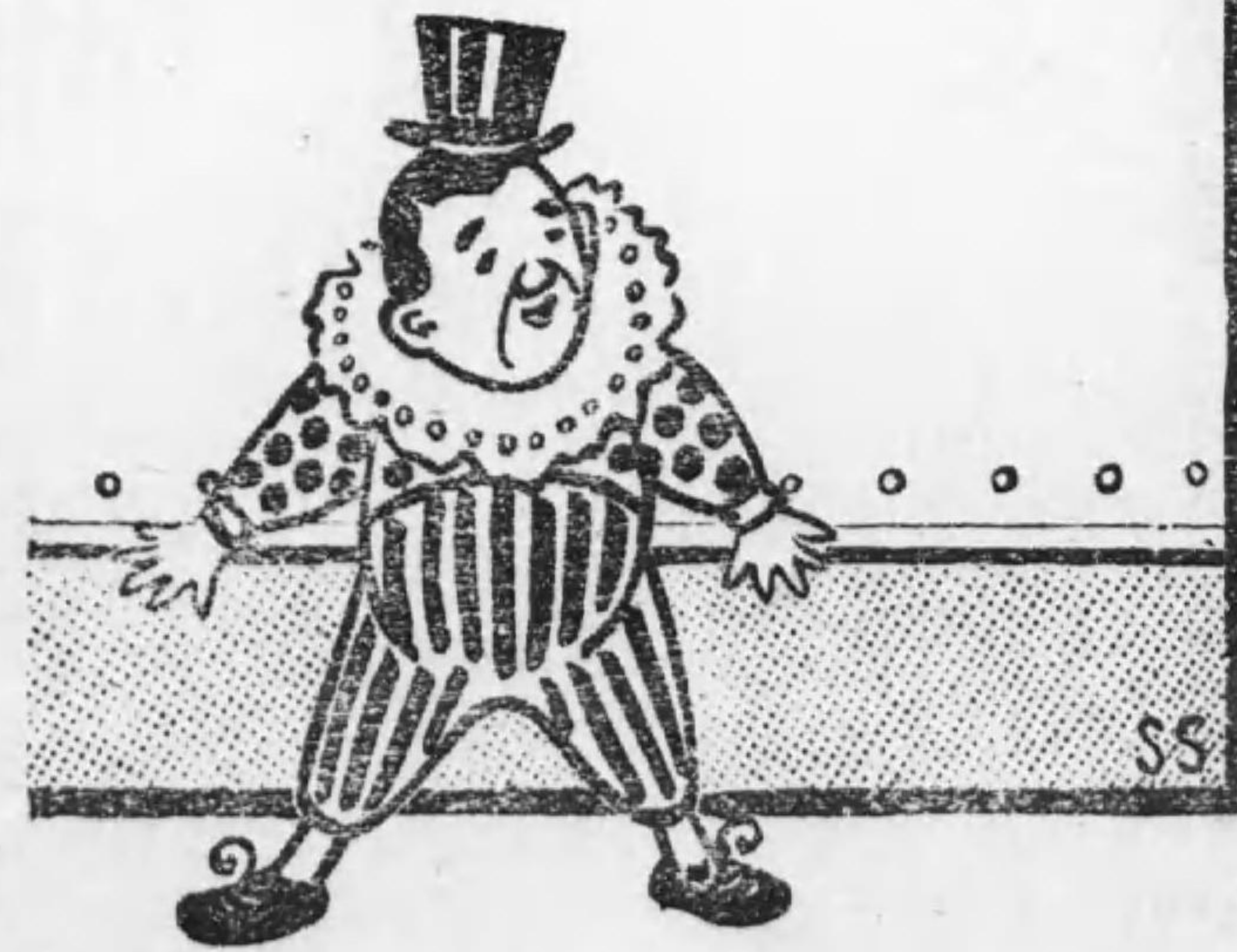
—目—

チ	ヤ	プ	リ	ン	の	艶	福
マ	ー	ベ	ル	嬢	の	日傘	行
ハ	ム	の	賣	ト			者
マ	ー	ベ	ル	の	先		生
ハ	ム	君	の	下	宿		人
デ	ブ	君	の	功			名
ハ	ム	君	の	骨	相		學
僞	チ	ヤ	プ	リ			ン



—次—

.....	4
.....	19
.....	131
.....	155
.....	197
.....	223
.....	252
.....	272



チャプリン君の艶福

一
亞米利加の或山奥に、父娘二人暮しの農家がありました、親父さんが大變な吝嗇家で、其の娘のケリーさん、今年二十五六、モウ嫁に行く年であるにも拘はらず、二十五六貫目もあるといふ、ビヤ樽ソツクの格好で、其上、出臂出胸の金壺眼、縮ツ毛の赤ツ毛と来て居るの、村の田吾作も手を出すものがありません、併し日蔭の豆も煎ける時にはは、じけるとか、ケリーさん、何となく此の頃は男が戀しくて堪りません、或日の事、家の背戸の畑へ出て來ました。

「本當に、家の阿父さん位分らず家はありやアしない、此んな若い娘を、いつまでも獨身で置くなんて、毫とは察して呉れたつて宜いぢやないか年寄ツてもものは、思ひやりが無さすぎるよ、ア、——つまらないッ……」

初めの中は、其邊にある花なんぞを撈つて居りましたが、仕舞ひには疳癩が起つたと見えて、力があるものだから、大きな煉瓦の破片を拾つて、無暗に、向ふ見ずに投げて居りました。

チャプリン君は、相變らずの姿で、大きな靴を引ずりながら、細いステツキを携げてやつて來ました。

「はてな、何か勤め口を探るか、金儲けをしなけりや、明日から食へ

なくなるぞ、此上物を食はずに一日でも居れば、痩せやうがなくなつて、生きたミイラが出来あがる、何か旨い金儲けはないものかなア……」

腕組みをして考へて居る途端に、ブーンといふ音がすると、大きな煉瓦が、ブーンとすつ飛んで来て、横ツ面へ、嫌といふほど打付つた。

「アッ……」

痛いと言はうとしたが、まだ、口の中でモガ／＼して居る中に、ベタリと引繰返されて了ひました。

「ウーン」眼を廻し損なつた。

驚ろいたのは、煉瓦を投げて居たケリーさんで、鶯鳥が犬に追はれ

たやうな形をして、チャプリン君の傍へ駆寄りました。

「アラ、どうかしましたか」

「どうかしましたどころぢやありませんよ、其邊を早やく探して下さい」

チャプリン君泣き聲で言ひました。

ケリーさんは眼を圓くして、四邊を見廻して、

「何を失したんです」

「何を失したつて、頭の破片が其邊に落ちて居るでせう、早く探して以前の通りに繼いで下さい」

茶碗ぢやあるまいし、頭がつげるものですか、

「どうもツイ疎勿で……」

「疎勿で、煉瓦なんぞ投げちや困りますね、眼がグラ〜としましてよ」

「どうかお許し下さい、妾が今介抱しますから」

ケリー嬢のおでぶさん、なか〜力がありませんから、チャプリン君を抱いて、自分の家へ連れ込みましたいろ〜介抱をして居たが、ケリーさん、男戀しいと思つて居た矢先、チャプリン君を見たんで、急になつかしいやうな氣がしました。

「此んな男を亭主にしたら、嘸輕くつて、自分のいふ事をよく聞くだらう」といふので、ポーツとなつて了ひました。

ところへケリーさんの阿父さんが出て来て、

「どうも娘が飛んだ疎勿をしましたさうで、モウお痛みはとれましたか」

チャプリン君は、汚ない親父が来たと思つて見て居ります。

ケリー嬢は、チャプリンを見たので、急に着物を着換に自分の室へ行きました、さうして、頻りに臀をなでたり、お化粧をしたり初めましたが、低い鼻は高くならず、出ツ臀は急に引込まず、大層氣を揉んで居ります。

チャプリン君と、ケリー嬢の親父さんと、話して居ると、戸外から入つて来たのは、村の牛乳屋さんです。

「どうか御勘定を頂だかして下さいまし」

「あゝ勘定かへ、今上げますよ」親父さんはチャプリン君の見て居る前で、大きな皮の紙入から、一枚の紙幣を出してやりました。

チャプリン君が、横目でチヨイと覗くと、紙入の中には、百圓紙幣だの、十圓紙幣だの、驚ろくほど澤山入つて居ます。

「ア、欲しいな、彼の中一枚でもあれば明日困らないんだが……」と思ふと、何だか金が欲しくて堪らなくなりましたから、何所へ納ふだらうと、念の爲め、ソツと見て居ますと、次の間の棚にある、汚ない火消壺の中へ入れました。

「オヤ、親父入れるよな火消壺てえのはあるが紙幣を入れる火消

壺は初めてだ、さてよ、是は一つ何とかして、彼のデブツチヨの娘を欺して、此の金を此方の手に巻上げてやらう、さうだく」

と獨りで頷づいて、戸外へ出で来ました、すると、何所から飛んで来たのか、薔薇の花が一つ、ボンと顔にあたりました、

「おやッ、誰だへ悪戯をするのは」と見ると、例のケリー嬢が本蔭に腰をかけて、チャプリン君を見て、おろでくをして居ます。

「めめく、是からが俺の技倆だぞ」と可笑な身振をして飛んで来ました。

「アラ、よく来て下さつたのね、本當に貴下は親切だわ」

「さうですか、そんなに親切だといふんなら、私も煉瓦を拾つて打付

「けませうか……ハ、ハ、ハ、ハ、時にねおデブ……ぢやないお嬢さん」
「ハイ」

「貴女見たやうな容貌善しを、此んな片田舎へ置くのは本當に惜しいもんですね、どうです、私と一緒に紐育へ出ませんか。都はようござんすよ、電車は通るし、自動車は駛るし、飛行機は飛ぶし、芝居はあるし、活動寫眞は見られるし、犬はワンと啼く、鳥はカア……」

「チャプリン君、有ったけの智慧を絞つて、甘い事をならべ立てました。夫でなくとも、チャプリン君にポーツとなつて居るところですからケリーさん、何だか臀を櫟ぐられるやうになりました、」

「アラ、そんなに紐育は宜いんですか、妾行つて見たいわ」

「さうでせう、おいでなさいよ、それは、眼がさめるやうな綺麗ですよ」

「行きたいッ……」

「泣かないでも宜いでせう。そんなに行きたいなら、僕が連れてつてあげませう」

「え、本當に……」

「本當ですとも、けれども、只では行かれませんよ」

「どうすりや宜いの」

「チヨイと耳をお貸しなさいよ……分つたでせう」

「それぢや、彼の火消壺の中に入つて居る紙入を……」

「さうです」

「譯はないわ、さあ、直ぐに支度して行きませうよ」

ケリーさん、戀に眼が眩んだものか。阿父さんが畑へ出た隙を狙つて例の火消壺の中から、大きな皮の紙入を盗み出して、是からチャプリン君と二人、ハイカラの道行といふことになりました。

二

チャプリン君とケリー嬢は、妙テコな形で紐育へとやつて來ましたさすがに世界有数の都だけあつて、電車自動車の往來は、織るやうであります、ケリーさんは、只だ此の賑かさに、眼を圓くして、驚ろき

ながらキョロ／＼して居ります。

「どうだい、話しの通りだらう」

話しながらやつて來ました。

此方はチャプリン君の情婦マーベル嬢です、美しい帽子と被つて、是から何かの買ひ物にでも行かうといふので、來かゝりました、

「おや、彼所へ、變な肥つた女と來たのは、チャプリンさんに違ひない、マア口惜しい、妾といふものがあるのに、何所の牛の骨といひたが、象の骨のやうな大きな女と、いやにイチャ／＼して、何所へ行くだらう……アア、此方の方へ來るよ、どうしてやらうかしら」

とある家の角に匿れて見て居ります、とは知らぬチャプリン君と

ケリー嬢の二人は、睦まじさうに手を執り合つて、此方へ來かゝりま
した、ヒヨイと角を曲らうとした時に、摺れ違ひながらに、マーベル
嬢が、いやといふほど、チャプリン君の横ッ腹を臂で突きました、

「アイタツ」

チャプリン君が見ると、マーベル嬢が何だか恨めしさうな眼をして
睨んで居ます、

「オヤ、マーベルさんかい」

「マーベルさんかぢやありませんよ、随分貴方も薄情だわね、何所の
人と一緒に歩いて居るのさ」

「是かい、是はね、その、なにさの」

ケリー嬢も、何だか知らないが、チャプリン君が、奇麗な女と話し
を初めたので、少し嫉けて來ました。

「ねえチャプリンさん、サア早く行きませうよ何をして居るの……行
きませうツたら行きませうよツ……」

方に任してグイ／＼引張るので、逆も力づくでは叶はない、チャプ
リン君は、猫につかまつた鼠のやうに、引摺られて行きます。

斯うなると、マーベルさんも只だは置かれませんが、

「何をなさるんです、其の男を引張つて、夫は妾の情人なんですよ」

「何ですつて、莫迦をいつちやいけないよ、此の人は妾と今駈落をし
て來たばかりだよ」

「そんな筈はない、此のデブツチョめ」

「何がデブツチョだ」と女同志のあられもない喧嘩になりました。辻に居た警官は、直ぐに靴を鳴らして、やつて来ました。

「コラ〜、其所で喧嘩をしては不可ん」

「ソ〜ラおいでなすつた」チャプリン君と、ケリー嬢は、親の金を盗んで来た弱身がありますから、巡査の顔を見ると逃げ出しました。

「ア、危なかつた」

「本當に危なかつたわね、是からどうしませう」

「茲まで逃げて来ればモウ大丈夫だ、兎に角、腹が減つたから、一ぱい飲んで行かう、此方へおいで……」

ケリー嬢を連れて、チャプリン君が、或カフェーへ入りました。

馬鹿に瘦せた男と、馬鹿に肥つた女とが入つて来たので、カフェーに居合した人々は、ビツクリして見て居ます、

「さあケリーさん、澤山飲んでお呉れ、是がブランデーといふ酒だ、どうだい甘いだらう」

「アラさうですか……マア甘いこと、お酒のやうぢやありませんね」口當りが宜いので、ツイ飲みすぎましたものか、少し酔ひが出ました。

マーベル嬢は、チャプリンに逃げられたので、口惜くて堪りません何でも此邊で居なくなつたのだから、大方、カフェーにでも入つたらうと思つて、入つて来て見ますと、案の條、二人は一つ卓子で、イチ

ヤ／＼やつて居ます、是を見ると、モウ、マーベル嬢も堪忍の緒が切れませんでした、

ツカ／＼とチャプリン君の傍へ来て、

「チャプリンさん、何んでも構はないから、妾と一緒においでなさいッ」

カーはい引立てたので、チャプリン君、今度はマーベルと二人で、ドン／＼他の室へ入つて了ひました。

後に残つたケリー嬢は、口惜いやら腹立たしいやらメチャ／＼になつて、其の上酔つぱらつて居るものですから、卓子の上にあつたコップだの皿だのを投げ初めました。

居合した人や、大勢の給仕女などが来て、慰さめましたが、なか／＼止みません、大あばれにあばれて居ます、其内に一人氣の利いた男がマンドリンを抱えて、大陽氣に弾き出した。

ケリーさんは、あばれくれたびれたところへ、マンドリンが鳴り出したので、今度は酔つぱらつて、妙な手つきで、變なダンスを踊り出しました。

チャプリン君は、マーベル嬢と次の室で酒を飲みながら、ケリー嬢の様子を見て居ると、モウ夢中になつて踊つて居るから、茲だとばかり飛出して来て、

「ケリーさん／＼、そんなに酔つて紙入を失すと不可ないから、私が

預かつて置かう」

ゴマカシて紙入を取上げると、

「マーベルさん、巧く行つたよ、サア、此の間に早く逃げよう」

チャプリン君とマーベル嬢の二人は、ドンく、カフェーを飛出して逃げて行きました。

とは知らぬケリーさん、さんざ踊りぬいて、いよく勘定といふ段になると、紙入はチャプリン君に渡して一文もない、夫ではチャプリン君を、といふので、探したが姿が見えません、

「どうも困りますね、一文なしで飲食をしちやア、仕方がないから警察で始末をつけませう」

酒屋の亭主から訴たへたので、巡査がやつて来ました、

「女の癖に無銭飲食をしたのは貴方かね、此方へおいで」

巡査が引張つて行かうとしたけれども、ケリーさんなかく力があるから、一人の巡査では自由になりません、三人が、りで漸くに警察署へ連れて来ました、

「オイく、さう踊つて居ては不可ないね……アイタ、随分力のあるお腎だな」

ケリーさんはセ、ラ笑つて、

「ハ、、、弱い人達だね、妾がお腎を振つたら巡査が倒れたよ、オイ巡査さん、チヨイと踊つて見ませうか、チイタカタツタ、チイタツ

タ、といふダンスを……」

「コラ〜、警察でダンスをやつちや困るね」

其内に署長の前へ連れ出しました、

「オイ、貴方かね無銭飲食をしたといふのは」

「オヤ〜、随分お前さんもデブチャンだね、妾の弟のやうに肥つ

て居るよ、チヨイト、そんなに怒らないでも宜いぢやないか」

「コレ〜、どうも始末にいかん女だな」

「どうせ妾は始末にいけないんだよ、チヨイト可愛い手をして居るね

接吻をさせてお呉れよ」

接吻をするのかと思つたら、ケリーさん、署長さんの食指にガブリ

と噛み付きました。

「アイタ、……」

「ハ、……、なか〜血のめぐりが宜いよ此の人は、妾が食ひ付いた

ら痛いとき……」

是で痛くなければ、死んで居るやうなものだ、仕方がないので、留置場へ入れる事になりました。

「オヤ今日は、皆さん、少々お邪魔をいたしますよ」

大變な勢ひで留置場へ入りました、留置場に居た連中も驚ろいて居ます。

カフェーを逃げ出したチャプリン君とマーベル嬢の二人は、俄かに

金が入つたので、途中ながら、

「先づ服装から拵らへやう」

「さうだわ」

洋服屋へ飛込んで、二人とも新調の洋服になつて、氣取つて出て來ました。

ケリーさんの伯父さんといふのが、紐育の大銀行の支店長をして、宏莊な邸を持つて居ます、其所に、長い間女中をして居るといふ女、賣り物に來た商人の噂さで、ケリーといふ田舎女が、警察の留置場へ入れられた、其の滑稽な事といつたら、見て居られないほどであつた

といふ話し、

「オヤ、どうも話しの様子では、當家の姪のやうだが、念の爲め電話で聞いて見やう」

卓上電話器をとつて、其の警察署へ聞き合せると、

「ハイ、さうですよ、大變肥つた、一見して田舎から出たばかり

といふ女です」

「名前は分りませんかね」

「ケリーといひましたよ」

「それでは、直ぐに金を持つて迎ひに參りますから、お渡し下さい」

「よろしい」チリ〜ン。

アレンといふ女中さん、無銭飲食で警察署へ引かれたのだから、金さへ持つて行けば出て来られるのです、金を持つて迎ひに出かけました。

署長に會つて、事情を話すと、

「よろしい、直ぐに連れておいでなさい」

巡查に命じて留置場からケリー嬢を連れ出させます。

「どうも皆さんお邪魔いたしました、又チヨク／＼参りますよ」

まだ酔ひがさめきらないものだから、此んな事をいひながら出て行きました。

アレンが伴なつて、警察署の戸外へ出て来たとき、丁度其所へ、新

調の洋服になつた、チャプリン君とマーベル嬢が、睦まじさうに手をとり合つて来加ゝりました、が、ケリーに見付けられては大變と、慌てゝ、大急ぎに逃げ出して、とある塀の陰にかくれて了ひました。

ケリーさんは、そんな事は知らない、妙な足どりで、チイタカタツタ、チイタツタ、とダンスをやりながら往來を歩いて、漸く伯父さん家へ着きました。

「一寸此の應接間で待つて在つしやい、今日那樣に申上げますから」とアレンさんは奥へ入りました。

應接間に残つたケリーさん、傍を見ると、飾り物の、鎧兜、其の傍に長い劔が立てかけてあります、

「オヤ、こりや面白い、チヨイと抜いて見ようか」

山出しで、作法も行儀も何にも知らないケリーさん、劔をスラリと引抜いて、應接間に立つて居る、當家の使用人に向つて、

「あのね、妾が今ダンスをやつて見せるよ、見ておいで、此んな面白いダンスは、とても紐育では見られないからね」

チイタカタツタチイタツタ、と又踊り初めました。

所へ伯父さんが、姪が来たといふので、應接間へ来て見ると此の騒ぎです。

「ケリー、お前、何をして居るんだ」

「アーラ伯父さん、大變頭が禿たわね、チヨイと接吻さして頂戴……」

滅茶々に噛り付いてキツスをすると、其の息の酒くさいの何の、樽柿の腐つたのを鼻の先へ持つて来たやうだ、伯父さんは、さすがに紐育で指折の紳士ですから、此の無作法に呆れ返りました、

「全體、どうして来たのかね」

「ナーニ、チヨイと好い男のチヤプリンといふ人と、親の金を盗んで逃げ出したんですよ、ところが其の男には他に情婦があつて、到頭すてられたんですよ」

彌よ呆れ返つた伯父さんは、遂に腹を立つて、

「そんな親不孝な罰當りは、私の家へ入れる事は出来ない、警察から救ひ出してやつたゞけで澤山だ、サア直ぐに出て行け……オイ此の

「女を戶外へ出して下さいなさい」

伯父さんの命令に使用人が三人が、りりで、忽ちケリーさんを玄關の石段から下へ突き出して下さいました。

ケリーさんが居なくなつた後へ、支配人の友人から電話で、某方面の高山へ、探險に出かけるが、是非同道しないかといふのです、素より好きでもあるし、さういふ事には頗る趣味の深い人ですから、夫では行かうといふので、伯父さんは友人と、或山へ出かけて行きました。

此方は例のチャプリン君とマーベルさんの二人です、新調の洋服を着て、得々としてやつて来たのは、或る活動寫真館の前。

「ねえチャプリンさん、活動寫真が大變面白いといふから見て行きませうよ」

「さうかい、俺は活動寫真でも他のは嫌ひだよ、チャプリンが一番好きだよ、彼奴の喜劇は面白いからね」

「アラさう、私も好きよ、彼の人はなかく、好い男だわ」

「オヤ、妬けるね」

二人は活動へ入りました。

丁度今一廻の終りで、是から佛蘭西の探偵物が初まらうといふところへです。

茲で活動の方へ移つて説明をします。

或一人の女學生が、公園を何か、楽しみであるのか、一人ほ、笑んで、ブラリ〜と歩いて居ります、其の後から、見えがくれに一人の悪漢が尾いて参りました、さういふ事とは神ならぬ身の女學生は少しも心付きません、何が不幸のもとになるか分らないもので、ハンケチを出さうとして、フト落したのは一通の手紙です、後から尾けて来た悪漢は、得たりかしこしと、其の手紙を拾ひあげて讀んで見ると、故郷の親達から、此の女學生の許へ金を送つたから、受とれといふ事が書いてあります、

「フ、ン、飛んだ椋鳥が引掛つたワイ」と獨語をいひながら、悪漢はバラ〜と飛んで来て、

「ア、モシ〜、貴女は今何かお落しになりやしませんか」
女學生は振向いて、

「ハイ……イ、エ、何も……」

「さうですか、併し、私が拾つた物があるんです、どうです、是です
が……」と例の手紙を見せました。

女學生は初めて氣が附いて、

「アツ、夫は確かに妾のです、どうも有難う存じました」

「さうでせう、確かに貴女のだらうと思ひました、ちやお渡し仕ませ
う……が、水心に魚心といふ事があります」

「それはお言葉には及びません、お禮をいたします」

「ぢや、斯うしませう、彼所にカフェーがあります、彼所でお渡しする事にしませう」

先に立つて悪漢は其のカフェーへ入りました、女學生も後から入ります、特に案内人に心付けをやつたので、誰も来ない奥まつた室へ入れました。

「さあ、お受取り下さい」

「有難うございました」

と手を出すのを悪漢は傍へ引寄せて、色仕掛で女を欺さうとするので、左りの手で、女を引よせて、右の手で、女の持つて居た手提の内から、手早く弗入を引ぬいて了ひました。

ところへ、一人の毒婦らしい女が入つて来ました、悪漢が目配せをする、直ぐに手を出して、弗入を受とつて、ソツと中を検ためて居ます。

女學生は、そんな事とは少しも氣が付かない様子です。

茲に名探偵があつて、何となく先刻カフェーへ入つた男が怪しいと云ふので、ドアを開けて入つて来ました、見ると毒婦らしい女が弗入をわけて、中を検めて居ます。

「オイ、モウ手がまわつたぞ、神妙にしろ」と聲をかけるより早く、手錠を箠めて了つた。

悪漢は驚ろいて、逃げやうとしたけれども、モウ追がれる途がなか

つた、同じ手錠を探偵の爲めに付けられて了つた。

弗入を持つて探偵は女學生の前へ来て、

「處女さん、氣をお付けなさい、幸ひ私が見て居たから宜いが、さうでないと飛んだ目に遭ふところだつたよ。」

女學生は只だ耻かしさうにして、禮を言つて出て行つて了つた、男女の悪者は警察署へ引かれ行く。

フィルムは夫で切れて、バツと場内は明るくなつた。今まで、チヤプリンとマーベル嬢は、此の探偵物を黙つて見て居たが、互ひに脛に疵持つ身の、何となく變な鹽梅になつた、ところへ隣りに居たのが、一人の刑事で、胸には大きな警官の記章が付いて居る。

ケリーの事があるので、茲で刑事に捉まれば、いづれ警察を引張られなけりやならない、それでは堪らぬと、目と目で話し合つて、チヤプリン君とマーベル嬢の二人は、逃げるが如く、此所を飛出しました。

此方はケリーさん、伯父さんの家からは逐ひ出される、戀人のチヤプリンさんの行衛は知れない、さりとして金は一文もなし、故郷へ歸るには歸られず、突に遭つた池の鴛鳥のやうに、ワア／＼泣きながら街路を徜徉ふて居りましたが、フト眼に付いたのは、とあるカフェーの表口に貼つてある給仕女入用の廣吉です。

「どうせ斯うなつたんだ仕方がない、今日から給仕女になつて一時をごまかさう」と直ぐに其カフェーへ入つて行きました。

無論給仕女になるには、譯はありません、忽ちケリーさん此家へ住み込む事になりました。

三

ケリーの伯父さんといふのは、頗ぶる旅行好きで、友人と共に家を出で、有名なアルプスともいふべき高山へと登つて参りました。さすが名にし負ふ山、夏の盛りといふのに、頂上に近づくと、雪は四邊を埋めて銀世界、谿間々々には、年中絶えぬ万年雪が、つもりつもりで、殆んど氷の谿を爲して居ります。さらでだに、岨しい山、漸やうに木の根をよぢ、岩角を傳ふて頂上

へと出でました。

「ア、漸やう頂上へ出ましたな」

「さうですね、幸ひ晴れて居るし、少しく四方を眺める事にしませうかね」

友人は後に、伯父さんなる人が先に、謂ばお鉢廻りといふが如き、危ない際を渡りながら、四方の景色を眺める事になりました。

聽て二三丁も歩んだかと思ふ頃、氷の爲めに、足を踏みすべらしたものか、先に立つて行つた伯父さんは、アツといふ間もなく、千仞の氷の谿へ、音もなく、真逆さまに轉げ落ちて了ひました。

友人の驚ろきは如何ばかりでありませうか、迥かに下を覗き見まし

たけれども、土地不案内の事でもあり、名も知れぬ深い谷間でありま
するから、如何んともすべき手段もない、只だ、谷間をながめて、暫
時は茫然として居りましたが、斯くては盡きじと轉ぶが如く下山をし
て、此の急を紐育の支配人の家へ知らせる事になりました。

チヤプリン君とマーベル嬢の二人は、活動を飛出して無茶苦茶でや
つて来たのは、とあるカフェーの前です。

「ねえチヤプちゃん、妾、大變お腹が減いたのよ」

「僕も減いたよ、人間てものは不思議だね」

「そりやあたりまへよ、誰だつて生きてる中はお腹が減くわ」

「丁度此所にカフェーがある、茲へ入つて食べようか」

「それが宜いわ」

二人は仲よくカフェーへ入つて来ました。

卓子をコツ／＼と敲くと給仕女が出て来て

「是は入つしやい、御注文は……」

「さうだね、マーちゃん、お前が好きな物をおいひよ」

「云でも宜いわ」

「それちや刺身に酢のもの……」西洋料理にそんなものはない。

給仕女は直ぐに承はつて入つて行つた、

「チヤプちゃん、是から先どうするつもり」

「どうにも斯うにも仕方がないさ、二人で仲よく暮さうよ」
話して居る中に注文の物が出来て来ました。

ケリーさんは、給仕女になつて、いよ／＼働く事になつたが、何をいふにも山出しで、其上疎勿し家と来て居るので、絶えず何かしら毀したり、落したりするので、料理番は始終叱言ばかり言つて居ます。

「サア／＼、ケリーさん、何をして居るんだね、そんな大きな臀を振り廻して居ないで、早く、注文を出してお呉れよ」

「ハイ／＼、どうせ妾のお臀は大きいのよ」

ズリ／＼しながら注支を澤山大皿に載せて、片手で軽々と差上げながら食堂の方へと出て来ました。

「ハイ御注支の品……」

隅の方で食べて居た女の人が、變な顔をして

「チヨイと姐さん、違ひますよ」

「黙つて召上れ、品は違つたつて、何も食べられないもんぢやありませんよ」

大變な見幕だから、其の女も仕方なしにフォークをとつて食べ初めました。

二番目に持つて来たのが、チャプリン君とマーベルさんの居る卓子です

「ハイ御注支が出来ましたよ」といひながらケリーさん、大皿を下さ

うとして、ヒヨイと見ると、サア大變、マーベルとチャプリン君の二人ですから、口惜さが込みあげて来て、眼玉を白黒させたかと思ふと餘りの驚ろきに、大皿は手からすべり落ちて、ガラ／＼と破れて、下に居るチャプリン君の頭へ、

チャプリン君飛上つて

「ツーツ、大變だツ」といふと、マーベル嬢の手をとつて、ドン／＼逃げ出した。

ケリーさん、一旦は倒れたが、やがて起上つたときには、モウ、チャプリン君も、マーベルも姿が見えません、オイ／＼泣きながら、

「今のお客は何所へ行つたんだ、彼奴は大泥棒の夫婦ですよ——」と

大聲で呼はりながら、卓子の上にあつた大ナイフを片手に持つと、夢我夢中で戸外へ飛出して

「泥棒——泥棒——」と吐鳴り出した、

居合した客も、他の給仕女も驚ろいて飛出して来て

「マア／＼、氣を落付けて／＼」と無理からに家の中へ引張り込んで行きました。

此方はチャプリン君とマーベル嬢、メチャ／＼に逃げ出して来たのが、公園地です。

「チャプリンさん、待つて頂戴よウ」

「ア、驚ろいた／＼、大變な奴に出會しちまつたもんだな」

「本當ね、随分妾だつて驚ろいたわ、まさか、彼所に、彼のおデブさんが居やうとは思ひませんもの、第一彼んな家へ入つた貴方が悪いのよ」

「莫迦を言つちや困るね、僕だつて何も、わざ／＼那んな者の居る家へなんぞへ行きやアしないよ、是も何かの縁だ、仕方がないさ」

「チヨイと此所まで来ればモウ大丈夫よ、ベンチで休みませうよ」

二人は、公園の、木蔭のベンチに腰をかけて、息を喘ませながら休んで居ます。

「夕刊が一錢ツ」

耳の傍で、不意に大きな聲をされたので、チャプリン君、ベンチか

ら轉げ落ちて驚ろきました。

「夕刊を買つてお呉れよ」

新聞賣りの子供だつたので、稍安心をすると、今度は少し腹を立てました、ポカンと頭を毆つて、

「此の小僧め、モ少し小さい聲でいへ」

「夕刊を買つておくれ」

「買つてやるから一枚置いて行け、不意に大きな聲なんぞをして、俺は又おでぶさんが来たのかと思つた、ア、脅かしやアがる」

ポケットから一錢出してやると、新聞賣は、夕刊を一枚置いて、

「夕刊が一錢々々……」チリン／＼鈴を鳴らしながら行つて了つた。

「妾に一枚貸して頂戴な」

「アイよ」八頁の新聞ですから、中の四頁を一枚引ぬいて、マーベルさんに渡しました。

マーベルさんは、却々ハイカラですから、ポケットから新式の眼鏡を出して、チヨイと曇を拭いて、新聞を見初めました。

チャプリン君も、四頁の新聞を、片端から読んで居ります。

ケリーさんの伯父さんの不在宅では、大勢の使用人が、彼方此方を掃除をして居ります、

チリンくくく、チリンくく、チリンくく。

「アラ電話ですよ」

「貴女入つしやいよ」

「だつて妾は掛りが違ふことよ」

「随分ね、貴女は何の彼んのと、用をしない算段ばかりなすつて、旦那が歸つたら言ひつけるわ」

一人の女中が電話口へ出ると、實は、お前さんの家の主人が、山から落ちて。行衛が知れない、無論死んだものに違ひないから、其つもりで公證人を呼んで、何とかしなければ不可ない、といふ報知です。

女中は驚ろいて、此の事を家中に知らせました、何をいふにも、使用人ばかりの家ですから鼎の沸くやうな騒ぎになりました。

電話によつて、公證人が飛んで来る、いろいろ取調べると、支配人には、夫人もなければ、子供もない、たつた一人である事が、ハツキリしました、さうなると、此の遺産を繼ぐのは、姪に當るケリーさん一人です、直ぐにケリーさんを相續人として、此の家へ迎えなければならぬといふ事になりました、伯父さんの遺産は少くとも五百萬圓以上あるのです。

公園のベンチに腰をかけて、夕刊を讀んで居たチャプリン君、不意に。

「チャプリン……」と妙挺な聲を出した。

「アラ、どうなすつたの」とマーベルさんが訊くと、

「イエ、ナニ此方の事さ」

態と平氣を裝ふて居るが、チャプリン君の眼は、新聞の或記事を、一生懸命に辿つて居ります、

其所には、どんな記事があるのかといふと。

「世界一の幸福な女」といふ標題で、

紐育の某銀行支配人は、友人某と共に探險に出かけて頂上から過まつて谿谷に墜落し、其儘行衛不明になつた、千仞の谷ではあり救助の見込みはない、遺産は五六百萬圓以上あるが、彼には妻もなく子もない、従がつて是だけの大財産を繼ぐものは、彼のたつた一人の

姪、ケリー嬢である、何等の努力もせず、不意に此の大財産の所有者となつた彼の女は、實に世界一の幸福者ともいふべきであらう。と言つたやうな記事が掲載せられて居たのでありました。

チャプリン君は、此の記事を夢中で読んで居たが、

「金儲けく、兎角浮世は金と女だ、彼んなデブさんでも、少し忍耐をすれば、忽ち富豪になれるんだ、有難いく、マーベルだつて可愛くない事はないけれども、五百萬圓の金には代へられない、茲が思案の……公園のベンチかな、ドッコイショ……」

壁音を偷んで、チャプリン君、ソロリ、ソロリと、妙な腰つきでマーベルさんの傍を逃げ出しました、少し離れると、夢中で、

「サア金儲け、金儲け、金儲け、金儲け」とドン／＼駆出して行つて了ひました。

後にはマーベル嬢、そんな事とは知らない、

「ねえ、チャプさん、茲に面白い事が書いてあつてよ……ねえ、チヨイと……」

振返つて見ると、誰も居ない、

「オヤ／＼／＼、チャプさんは何うしたんだらう、豈夫消えちまつた譯ぢやなからうに……チャプリンさん——、チャプヤンさ——ん……」

呼んだが答えがない、

「オヤ／＼、新聞も捨てあるよ、可怪な事があればあるもんだ」
何心なくマーベル嬢が、捨てある新聞を拾ひとつて見ると、直ぐに
眼に入つたのは、ケリーの記事です、

「ア／＼／＼、是だよ／＼、マア呆れ返つた人だ、妾といふものが
あるのに、那んなおデブの鴛鳥なんぞと浮氣をして、本當に油斷も
隙もなりぬアしない、口惜いッ」

新聞をメ／＼と裂いて捨てたが、夫だけでは逆も腹が癒へない、
「さうだ、此上は妾が、其の家へ女中に入つて、出来るだけ、二人の
邪魔をしてやらう」

獨言をいひながら、足早に公園を出て行きました。

此方はチャプリン君、やつて来たのは例のカフェーです、

「今日は」

見るとチャプリン君だから、給仕女をして居るケリーさん、

「オヤ／＼、圖太しい人だねお前さんは」

「マア宜いよ、先刻は酔つぱらつて居たんだから勘忍しておくれ、ね、
お前に限るんだ」

無暗に傍へ寄つて来て、手と言はず、首といはず、メチャ／＼に接吻
をするものだから、ケリーさん、忽ち海鼠のやうに身も心も解けて了
ひました。

「チャプリンさん、今度は捨てちや嫌よ」

「へ、、、、捨てるどころか、俺にとつては大切の弗箱だ」

「え、何ですつて」

「ナーニ此方の事さ、サア、何でも宜いから僕と一緒においでよ」

「何所へ行くのさ」

「何所でも宜いよ、黙つて尾いておいし」

「だつて、何所だか分らないぢや困る」

「困るも大圓もあるものか、何でも宜いから僕と一緒においで」

「チャプリン君、無理耶理にケリーの手を執つて、グイ〜カフエーを引張り出して、やつて来たのは教會堂です、石段を大急ぎで登つて、ドアを開けると丁度宣教師が家に居りました。

「やア居た〜、宣教師さん、僕と此の女と結婚をするんです、チャ

イと式を行つて下さい」

ケリーさんは眼を圓くして、

「アラ、チャプリンさん、妾、結婚するの」

「さうだよ」

「耻かしいわ」

「へ、、恥かしい面かい」

「え」

「ナーニ此方の事だよ、何でも宜いから、此の指環を……、宣教師さん、何をして居るんだ、早く式をやつてお呉れ……アレ、慌てちや

「不可ないよ、それは、祈禱書ぢやない、電話帳だよ……アレ引繰返
つた、何をして居るんだなア……」

宣教師は漸くの事で、祈禱書を手に持つて、十字を切つて、

「天に在ます神よ……」

と結婚式の禱りを初めました、臆てチャプリン君とケリーさんの手
を結び合せて、其の上で、結婚の誓ひをさせます、チャプリン君の手
によつて、結婚の指環はケリーさんの指に嵌られました。

式は、直ぐに済んで了つたのです。

ケリーさんの喜びつたらありません、チャプリン君を抱くやうに
して、二人は會堂を出て、カフェーへ歸つて來ました。

茲に、ケリーの伯父さんの家では、公證人が來て、いよくケリー
が相続人といふことになつたのすから、捨ても置かれぬ、アレンと
いふ女中さんと、家令と、公證人の三人で、何でも、カフェーに居る
といふ事を聞いたので、訪ねて來て見ると、今まで家に居たが、何だ
か小さな男と一緒に出て行つたといふ、どうしたのだらうと思つて居
るところへ、二人は睦まじさうに、ダンスをやりながら、口笛で入つ
て來ました。

公證人が聲をかけて、

「貴女ですか、ケリーさんと仰しやるのは」

「さうです」

「貴女は今から五百万圓の財産の所有者です、伯父さんは、山から落ちて死んで了つたのです」

ケリーさんは、實に夢に夢を見て居るやうな氣がします。

「一體どうした譯です」

「貴女は毫とも知らないんですか、斯ういふ譯です」

と公證人は一通り事情を打あけて、

「さういふ理由で、貴女が、彼の財産を繼ぐ事になつたんです」

「え、夫ぢや、五百万圓の所有者に」

「さうです」

「チャプリンさん、それで貴方は妾との結婚を急いだのですね」

「さうですよ、新聞を見たから、急いでやつて來たんです、どうです早いもんでせう」

「マア呆れ返つた、それぢや貴方は妾と結婚をしたんでなくつて、其の遺産と結婚をしたんでせう」

「マア、そんなもんですね」

「甚い人ね随分……」

「世の中は其の位ゐにしなけりや、甘い酒の一ぱいも飲めませんよ、ハ、ハ、ハ、」

公證人は先に立つて、兎に角、ケリーの伯父さんの家へと案内をしました。

マーベル嬢は、美しい顔に何となく憂ひを帯びて、一層美人に見えます、眉を八の字にして、佻しさに、番ひをはなれた片鶉で、シヨボ／＼とやつて来たのは、ケリーの伯父さんの家、見ると幸ひ廣告が出て居ります。

『女中至急入用』

鈴を押すと男が出て来ました。

「御免下さい、妾は、門口の廣告を見て参つた女中志願の者です、妾見たやうなものでもお使い下さる譯には参りませんでせうか」
男が見ると美人ですから、

「イエスオーライ、お前さん見たやうな美しい人なら、誰に話す必要もない、直ぐに家へ入つて下さい」

「さうですか、ちや使つて下さるんですね」

「エ、使ふにも使はないにも、お前さん見たやうな美しい女ならキツト使へますよ、若し、誰か苦情をいふものがあつたら、吾輩が相手になつてやる」

大變な奴があつたもので、マーベルさんの容貌が美しいもんだから、此の男一人ぎめに定めて家の中へ引入れました。

マーベル嬢は計畫がスツカリ當つて、目出度く此の家の女中になりましたが、果して、どんな滑稽を仕出來すでありますか、辯士交代

といふところですが、萬年筆のインクを足して書くことにします。

四

今日は、新婚の披露やら、いろ／＼目出度い事がかさなつたので、ケリーさんが主人で、朝野の紳士淑女を招待して、大舞踏會を開催する事になりました、チャプリン君も従がつて主人役ですから、燕尾服を着て、大いに納まり返つて居ます。

「さあ、チャプリンさん、妾と一緒に廣間へ入つしやい」
ケリーさんが手を執つて、大廣間へ入つて來ました、モウ大廣間には來賓が大勢居ます。

何といつても、紐育で有數な銀行の支配人の家ですから、邸内なども頗る廣く、舞踏室の設けまであります、正面には大理石の大石段があつて、夫を下ると下は名本の寄木になつて居る舞踏室で、一方には何千人と入るほどの椅子が、皆な天鷲絨の布が張りつめてあつて、晝でも電氣は煌々ど輝やき、其の間々には、大鉢に植えられた、いろ／＼の木や草などが布置してあつて、其の壯麗さは、迎も見たものでなければ、想々も出來ないほどで、丁度此の頃の活動寫眞の、西洋物で見ると佛蘭西の名寫眞とでもいふやうなものに、モツと、より以上の輪をかけた如き美しくしさであります。

チャプリン君とケリーさんの二人は、盛裝を凝らして、一寸會釋を

しながら茲の席へ入つて椅子に並んで着きました。

當日招待される紳士や淑女達は、主人に挨拶やら、祝詞やらを述べやうとて、ゾロ／＼と、此二人の主人公の前へ押しかけて来ました。無論、日本あたりの禮儀と異つて、淑女達は先づチャプリン君の方へ先に來て、いろ／＼お世辭や愛嬌を振りまいて行き、紳士達はケリ／＼さんの方へ來て有ツたけのお世辭をならべて行くのです。其の賑やかさは、實に素晴らしいもので恰かも我國の、外務省の夜會の如き状態です。

此方はマーベル嬢、首尾よく女中に化け込みはしたものの、詰らな

い葡萄酒の給仕なぞをさせられて居ては、甚はだ役不足を感せずには居られません。

「ア、つまらない、大層奥の方ぢや賑やかなが、一寸見て來ようかしら」

大きなガラスの器の中に入つて居る葡萄酒を、咽喉のかはいた人達が來て飲む事になつて居る、其の葡萄酒を、コップに體裁よく入れて、お客の前に出すのが、マーベル嬢の、今日の宴會の役なんです、腹の中では何と思つても、やはり他の女中さん達と同じく、白いエプロンをかけて、つまらない役ながら、お給仕をとなしくしなればならぬのです、それなのに何だか奥の方が賑やかなので、甚だ心の中は穩

やかではありません。

「ヘン、チャプリンさんめ、ケリーの肥ツチヨと、どんな事をいつて居るかしたら、第一、彼の瘦つぼちと、彼のおでぶちやんと、睦しさをうに舞踏をやるのが見たいものだ、ア、つまらなし……」
其の實、心の中では、少し妬けるから、マーベルさん、給仕をして黙つては居られない、女中取締りの男の眼を掠めて、シャンペンをお盆に載せ、夫を運び込む態をして、賑やかな、はしやいだ音楽の音のする室を差して、キヨロ／＼しながらやつて来ました。

ドアを開けると、大勢の紳士と淑女は、樂の音につれて、今しもトウ舞踏をやつて居ます。

マーベルさんが、其の舞踏の室へ入つて来て見ると、案の如くチャプリンさん、得意の臀を妙に振りながら、ケリーと二人で、一寸とオツなところを見せて踊つて居ます。

「アラ、妾の思つた通りやつて居るよ、本當に憎らしい」

態と知んふりをして、チャプリン君の背後の方へ廻つて行きましたソツと、片手にシャンペンの壺を持つて、隙があつたらチャプリンの臀を打つて、こんな變なところを見せびらかして居る敵討をしてやろう、夫から、猶一つには、自分が此家へ女中に入つて居ることを知らせれば、元々自分に惚れて居るチャプリンだから、おでぶさんの眼を忍んで、いろ／＼又自分に親切な事も言つてくれるだらう、さうして

終しまひには金かねだけ取とつて了しまつて、おでぶさんを打うち捨ちやつて、二人ふたりで何どこ所こへでも駈かけ落おちをしようと、深ふかくも巧たくんで居ゐるマーベル嬢ぢやう、漸ぜん次じチャプリン君くんの傍そばへ近ちか付ついて行ゆく。

チャプリン君くん、そんな痛いたい思おもひを眼めの前まへにしようとは思おもひません。

「チイタラタツタ、チイタツタ、チイタラタツタ、チイタツタ、チイタツタ」

と樂たのしさうに、ケリーさんと踊おどつて居ゐます、瘦やせたのと肥ふとつたのが手てを執とり合あつてやつて居ゐるので、まるで次じ亞あ燐りんを服のんだ人ひとと服のまない人ひとの廣くわ告こくがダンスをややつて居ゐるやうに見みえます。

其その内うちに、チイタツタ、といふ音おん樂がくと共ともに、チャプリン君くんの臀しりがヒョイとマーベルさんの鼻はなつ先さきへ飛とびだ出した。

「占しめたツ」とも言いはず、待まつてましたとばかりに、其その臀しりをコツ——ンと、思おもひきりウンと、シャンペンびんの饜うで打うちました。

「アイタ、、、田たの中なかで——……」そんな洒しゃ落れをいふどころぢやない引ひ繰くり返かへりながら、振ふりかへ返かへると、

「ヤツ、是これは大たい變へん、マーベルさんが來きて居ゐるぞ」と眼めと眼めで知しらせ合あひました。

幸さいはひ其その時ときは、ケリーさん氣きが付つかなかつた。

「何なにをして居ゐるんですよ、サア、確しつ乎かりして踊おどるんですよ、ようござんすか、チイタラタツタ、チイタツタ……」

又また二人ふたりは踊おどり出だしました。

マーベルさんは、兎に角痛快にお臀をいやといふほど打つたり、其上、自分の此所に居る事をチャプリンさんに知らせたから、今にやつて来るだらうと、態とすまして、葡萄酒の給仕をして居ます。

ところへ、どうごまかしたのか、チャプリンさんがやつて来た、

「オイ、マーベル、お前も此所に居たのかい」

マーベルさんは態と知らん顔をして、

「ア、詰らない、世の中が忌になつた、妾は死んだ方が宜い……」

チャプリン君傍へ来てマーベルの肩を叩いて、

「オイ、僕だよ」

「アラ、チャプリンさん、宜いの此んなところへ来て、ケリーさんに

怒られやしなくつて」

「ヘン、ケリーが何だい、彼のでぶさんが何だい、肥ッチョコが……」

「そんなに陰ではかり威張らないで、チト、ケリーさんの前でお威張り

なさいよ」

「威張るともさ、威張らなくつてどうするもんか、亭主關白の位わだ」

「巧い事をいつて居ること、妾でさへ打捨つて行つたくせに」

「嘘だよ、お前には本當に惚れて居るんだが、ケリーには、金に惚れ

たんだ」

「本當」

「本當さ」

「マア嬉しい、妾可愛がつて頂戴」

「チョイト、此方へおいで」

「アラ、宜いわよ」

二人で話して居るのを見た取締りの男は、ツカ／＼とやつて来て、
「オイ／＼、マーベル、お前御主人に失禮をしては不可ないよ、旦那様に話したんぞ仕掛けて失禮ぢやないか」

「オイ／＼、マーベル、お前御主人に失禮をしては不可ないよ、旦那様に話したんぞ仕掛けて失禮ぢやないか」

「オイ／＼、マーベル、お前御主人に失禮をしては不可ないよ、旦那様に話したんぞ仕掛けて失禮ぢやないか」

「お前こそ引込んでろ、此所へ出る幕ぢやない、馬鹿ッ」

鶴の一聲に、其男は驚ろいてコソ／＼に行つて了ひました。

猶も二人が話して居ると、ケリーさん、大きな身体をユスリながら

「チャプリンさん、チャプリンさん、妾の可愛いチャプリンさん

と大声で叫びながら入つて来ました、直ぐに見付けて、

「チャプリンさん、貴方、何をして入つしやるのさ、早く此方へ入つ

しやいよ」

「アイよ、今行くよ」

「今行くよぢやないわよ、早く来ないとお客様達に失禮だわ、何をして居るの」

「今ね鳥渡咽喉がかはいたから、葡萄酒を一ぱい飲まうと思つて」

「何だか當てになりやしない、貴方は全體浮氣なんだから、若しもそんな事をする、妾生かしちや置かないわ」

「オ、怖いく、今行くよ」

投げ接吻をしながらチャプリンさん、ケリーさんに引張られて行つて了ひました。

當日の來賓中には、例のコンクリーさんも交つて居ます、嫌味タツプリで、今入つて來たケリーの所へ挨拶に來ました、

「大層お綺麗ですな、誠に貴女は肉づきがよくて入つしやる、全體何を召上つてそんなにお肥りなすつたので」なんぞとお世辭の百萬多羅をならべて居る中はよかつたが、漸次傍へよつて來て、變な身振を

します。

「オヤ／＼、人を馬鹿にした野郎が來た、どれ此の暇にモウ一度マーベルの所へ行つて會つて來ようか」

とチャプリンさん、是も少し妬けるものだから、又直ぐにマーベルさんの居る室へ入つて來ました。

「又來たよ」

「よく入しつたわね」

「ナニね、あのデブさん、變な男と話しをして居るから、癪に障つて堪らないで來ちまつたのさ」

「随分、物好きの男もあるものね」

「本當だよ、チヨイと此方へおいでよ、話しがあるから」

「どつて、又ケリーさんが角を生やすといけないわ」

「宜いよ、彼んな豚に何が出来るものかね、チヨイと眼を忍んで話しをしよう」

「さう、大丈夫」

「大丈夫だよ」

チャプヤン君、マーベルさんの手をとつて、自分の寢室へ入つて來た上からは、羽二重の、ぬいどりのデコ／＼にしてあるカーテンが下りて居ます、其下に寢床があつて、其所には、いろ／＼枕や、草花の器やが飾つてあります、

「誰も居ないから、憚りなく話しても宜いよ」

「嬉しいわね、妾、随分貴方に會ひたくつて、苦心したのよ」

「さうだらう、僕だつて實はお前に會ひたかつたんだ」

「妾もね」

二人は嬉しさに抱きついて、熱いキツスを交しました。ところへ、ドタバタ、ガタ／＼、といふ足音です、

「何だらう」

「何でせう」

二人が見る間もない、眼の前に恐ろしい鬼のやうな顔をして立つて居るのはケリーさんです、

「ナ、何をして居たんです」血相が變つて居ます、チャプリン君は變な笑ひ方をして、

「何もして居やしない、一寸此の女と話して居たのさ」

「イエ、話しばかりぢやないでせう、エ、口惜ツ……」

といふと、モウ逆上て居るから堪りませぬ、寢室に護身用として備へてあつた短銃を取出すと、夢中で一發ドーンと打放しました、

「ヤア、撃つたア……」チャプリン君も、マーベル嬢も、腰をぬかす程驚ろいて、ドン／＼逃出した、ケリーさんは、逃がさじと、ピストルを片手に追駈けます。

丁度來合して居た人々も、此の短銃の音に驚ろいて、蜘蛛の子を散

らすが如く、逃げ出しました。

チャプリン君もマーベル嬢も命がけで逃げて歩きましたが、何をいふにもドン／＼短銃を放ちながら追駈けるので、夢我夢中で、應接間へ逃げ込んで、マーベルは、絨壇の下へ、チャプリンは大きな飾り瓶の中へ入つて了つた。

ケリーさんは、茲まで來て、短銃を捨てると、飾つてあつた銃を持つて、ブーン、ブーンと振り廻しながら、其の瓶を打壊すと、中からチャプリン君が慄えながら飛出しました。

其の騒ぎの最中に、家の門前へ一臺の自働車が着きました、中から立出たのは、死んだと思つた此の家の主人、ケリーさんの伯父さん

です、山から落ちたけれども、幸ひに大した怪我もなく、救ひあげられて、身體も恢復したので歸つて來たのでした。

家へ歸つて見ると此の始末ですから、驚ろいて入つて見ると、ケリーが暴れて居ます。

「コラケリー何をして居るんだ」と吐鳴りつけました。

ケリーさんも是には少からず面喰つた様子です。

「ヤア伯父さん」

「伯父さんぢやない、どうしたんだ」

居合した、伯父さんの家に永く使はれた男から「實は是々云々です」と一伍一什の話しをいたしました。

伯父さんも呆れ返つて、

「そんな女は家へ置かれな、直ぐに出て行け、客も皆んな歸つて貰ひたい」

斯うなつては、ケリーさんも暴れられない、

「伯父さん、夫ぢや妾は行きます」

「行け、顔を見るのもいやだ」

來賓もドヤ／＼と戸外へ出て行く。

チャプリン君、モウ斯うなつてはケリーと夫婦になつて居る氣はありません。

「マーベル、マーベルは何所へ行つた」

「此所ですよ」

「此所ですぢや分らない、聲はすれども姿は見えず、ホンにお前は屁のやうだ」

「何をいつて居るのさ、妾此方よ」

「何だ、大變なところに匿れて居たんだな、サア、早く二人で駈落をしよう……」

「さう、ぢや逃げませうかね」

二人で逃げ出して行く後姿を見たケリーさん、大聲をあげて、

「誰か来て下さいよ、妾の亭主を泥棒して行くものがありますよ」

そんな泥棒があるものぢやない、此の聲によつて、警官が自働車で

乗りつけた

「どうしたんです」

「彼所へ行く二人を捕まへて下さい」

自働車は勢ひよく、二人の後を追かけます。

二人は、ドン／＼逃げては来たが、生憎是が濱にあつた棧橋でした是から先へ行けば海の中へ落ちて了はなければならぬ、マゴ／＼して居る中に自働車が走つて来たが、ブレーキに故障があつたのか、勢ひひ込んで海の中へ眞逆さまにドブと水煙り立て、落ち込みました。

後からヨチ／＼と駈け出して来たケリーさんも、其のあほりを喰つ

て、同じく海の中へポチャーン。

「チャプリン君も、斯うなつては見ても居られない、人を呼び集めて漸やくの事で、ケリーを初め、一同を救ひ上げました、併しケリーさんは餘程水を飲んだと見えて、只だでさへ大きい女が、一層大きなものになりました。

水を吐かせて、さて、チャプリン君と、マーベル嬢の二人が介抱してやると、眼を細くあけて、グツタリとして居たが、はめて居た指環をぬいて、

「チャプリンさん、妾はモウ、お前さんと戀をして懲々しました、結婚の約束をしましたが、此んな苦しい思ひをするのなら、生涯獨身

でくらしの方が宜いと思ひます、此の婚約指環は貴方の手にお返し申します」

とチャプリン君に返しました、チャプリン君はニヤリと笑つて、

「さうかい、夫ぢや仕方がない、實は僕も君のやうな肥ツチヨは嫌ひなんだ、金があれば兎も角、金がなくなつた今日、僕も君と結婚は仕度くないんだよ、其の代り……ねえマーベルさん」

「何です」

「此の指環を貴方に差上げたいと思つて居ます、今まで戀中だつたんだから、快よく受けて、僕と婚約をして下さるでせうね」

此の時まで黙つて見て居たマーベル嬢は、頭を振つて、

「妾も嫌です」

「何故嫌なんです」

「デモ考へて御覧なさいな、金がなくなつたら捨てるなんて、そんな偽わりの結婚をするやうな貴下と生涯楽しく暮す事が出来ますか、さういふ冷たい心の人と、妾には結婚は出来ません、妾も此の戀に懲りましたから、是から先獨身で生涯終るつもりです、お氣の毒さ
ま……」

「チャプリン君は、皆んな當が外れたので、何といつてよいやら話も出ない、只だ口を開いてポカーンとして了りました。」

マーベル嬢の日傘飛行

「センネット、起きんか、これ、センネット」

「寝やしません、大丈夫です、起きてますよ」

「嘘を吐け、見ろ、涎れが垂れてるぢやないか」

「ナニ涎れぢやありません、鼻汁なんで——」

「體裁のない奴だ、みつともない、汽車の中で」

「へエ」

「へエぢやない、少しはぢやんとして居るもんだ、第一主人の俺がみつともなくつて仕様がなない」

「ですが旦那、此の揺れ工合が何とも云へない快い心持なんで——」
「快い心持だつて涎れを垂らして居眠りをして居る奴があるか、酔
つぱらつた袋鼠ぢやあるまいし眞赤な眼をして體裁のない、氣を注
けろ」

「へエ」

「些と外の風にも當つたら眼が覺めるだらう、此處へ來い、俺が場
所を替つてやるから——」

旦那のジョン、アントニー、ジョーンス、姓名が長いやうにお顔も
大分長い、おん馬のやうな細くつて長いお顔にクシャ／＼ツとした皺
を寄せて苦い顔をしながらお供のセンネットと場所を替る、

羊腸たる山間の徑路を駛る汽車は急勾配の上に馬力を懸けて居るか
ら右に左に揺れること夥しい、浪を打つてるやうな客車の内部を、ジ
ヨンさん、纏足した支那の婦人よろしくと云つた格好でヒョクタクお
供のセンネットと場所を替る、

大速力の汽車は風を切つて矢のやうに進む、窓から風が遠慮なくヒ
ユウ／＼舞ひ込む、正面にこれを受けたジョンさん。眼も口も開けら
れたものぢやないがセンネットに云つた手前があるから齒を喰ひ緊つ
てジツとこれを我慢する。

睡氣ざましに懷中から新聞を出したセンネット讀まうと思つて擴げ
ると、是はしたり鞆の口を飛び出したやうな風だから堪らない、齒を

喰ひ緊つて虫のやうな呼吸をして居る旦那のジヨンさんの顔へ持つてつてピシヤン！糊で貼つたやうに新聞紙が風でへばり付いた。

「何をするんだ、センネット、氣を注けろ」

「氣を注けろつたつて旦那、儂がしたんちやありません、風の所爲だ旦那が窓を開けてそとの風にでもあたれつてえから窓を開けたんで——、風の奴が黙つて這入るから悪い」

「餘計な事を云ふな、何でも宜いから新聞なんか見るな」

「へエ、ですが旦那、たゞ斯うやつて居るつてえのも退屈で辛うがすな、何か斯う、代りに口の方へでもしてこますものはありませんでせうか」

「ない」

「ない？　これは驚ろいた、まるで木で鼻を括つたやうな御挨拶ですねえ、酔つぱらつた袋鼠みたいに赤い眼をしちや見ともねえつてから、旦那の吩咐だ儘よ仕方がねえつてんで、斯うして石炭殻のしやッ面へ當るのを我慢して風に吹き曝されて居るんでがせう、退屈しのぎに讀まうと思つた儂の新聞が旦那の顔へ喰ひ付いたつて何も儂の所爲ぢやありませんや、新聞が自分で旦那の顔へ喰ひ付いたんで儂にさらく憎い處はござんすまいと思ひますが、旦那え、如何でござんせう」

「うるさい奴だ、喰意地の張つた意地の汚い奴だなア、其處にアイヌ

クリームがあるから、それでも喰つて黙つて居ろ」

「占めたッ！」

「あれだ、黙つて喋舌らずに喰へ、馬鹿」

睡氣のさしたところへ少々旦那の叱言を食つたので聊かお頭の冠を拵げたお供のセンネット、際どいところで乙に搦んだ一言が美事アイスクリームと出たので機嫌がすつかり直つてしまつた、現金な奴だ、旦那の旅行靴の中からアイスクリームの即製器械を取出して、こんな時でもなくツちやウンと食へないとばかりに詰めたはく、ミルクに、砂糖に、アイスクリームの原料をしこたま器械に押し込んで両手で蓋をして、チャツ、チャツ、チャツ、チャツ！

原料が多いから、アイスクリーム、遠慮なしに、猛烈に沸騰を始めた、傍の窓からは是も遠慮なしに猛烈に風が煙りと一緒に石炭殻のお土産を持つて吹込む、

「ウ、こ、これ、これ、センネット、何を馬鹿をしたんだ、これを見ろ、これを」

猛烈に沸騰をしたアイスクリームの飛沫ちりが、ジョンさんの頭から顔から胸から一面に、鴉が野中の地藏様へ糞を引ッ懸けたやうである。

汽車は相變らず大速度でだん／＼ジョンさんの降りる停車場へ近づ

「旦那、もうそろそろお降りの支度をなすつて」

列車給仕の注意に、ジョンさん、アイスクリームの飛沫を拭くのもそこ〜、

「おい、センネット、早く着物を着せろ、俺に、何を愚圖々々してるんだ、仕様のない奴だ、アレ、まだ指の先に附着してるアイスクリームを舐めてやがる、蹴飛ばすぞ、馬鹿野郎！」

大地震のやうに揺れながら大速度で駛る列車の反動にお供のセンネットの奴、ジョンさんの上着を手にとって赤垣源藏徳利の別れ宜敷くだ。

「馬鹿、何をヒョロ〜してるんだ。早く着せないか、早く、もう停

車場へ着くぢやないか」

「今着せますよ、そんなに慌てなくつたつて大丈夫ですよ、停車場へ着かなきゃや汽車は止まりやしませんから……」

「生意氣いふな、當り前だ、文句を云ふひまにさつさと着せろ」

「宜うがすかい旦那」

「嫌な奴だなア、泥棒猫が秋刀魚を狙やしまひし、變な目附きをして人を睨むない」

「睨みやしませんがね、斯う見當をつけないと飛んでもない處へ着物が行つちまいさうですからね」

「どちな奴だ、何でも宜いから早くしろ、ホレ、見ろ、もう停車場が

彼所へ来た、さ、早くしろ、早く何を愚圖々々してるんだ、チョツ！
仕様の無い奴だ、ほんとに蹴飛ばすぞ」

呷鳴りつけられてお供のセンネット、旦那のジョンさんの上着を両手に擴げてガタクリン、ドチクリン、大浪のやうに揺れる汽車の床板をウンとばかりに兩腿に力を入れて踏ん張りながら一イニウ三イの懸け聲よろしく矢頃を計つてジョンさんの脊中へ跳びついた、

「馬鹿野郎、着物を着せるのに人の脊中へ跳びつく奴があるか、頓馬め！」

「オツトツト、そのお叱言は旦那御無理でござんすよ、何せ此の通り——ア痛ツ、こん畜生、何だつて斯んな處へ扉をつけて置きやがる

んだい、見ろ、瘤が出来ちまつたい——御覽の通り證據は目前、車がガタクリン、ドチクリンなんで従つて海瀟をくらつた海豚ぢやないかとんと足許が極らねえんで」

「つべこべ文句は云はなくつても宜い、早く其の荷物を持つてさつさと降りる支度をしろ」

どちなセンネットに旦那のジョンさん尠からず憤れかへる。

汽車は早くも停車場へ着く、漸とこのことで汽車を飛び出した主従二人、ヤレ〜と思ふ間もなく是はしたり——

「チョイト、貴郎何をなさるんです、失禮な、人のお臀なんか突ついで」

見ると、いやはや、又もやセンネットの失策で両手に持った片々の荷物が汽車を降りる機会に脊後向きに立つて居た件の御婦人のお臀をイヤと云ふほど突ついたのでから無理はない、御亭主よりほかに觸られたことはないと云ふ大切なお臀だから御婦人眞赤になつて憤り立つ。

「オイ、センネット、貴様のお蔭で俺が怒られたぢやないか、謝れ、此の御婦人に――」

「ナニ旦那、打捨つときなさいまし、その女ツちよの尻が人並みはづれて大きいんだから」

「何ですつて、も一度いつて御覧なさい、婦人を侮辱するんですか」

金切り聲でペラ／＼と云ふのが聞えたかと思ふと突如りビシヤビシヤツと二人の軋べたへ平手のしなつたのが飛んで来た、驚ろいたのは二人、横ツとびに停車場を飛び出した、

「あの、お父さん、今日はお天氣がいゝから、わたし遠乗りをして遊んで来やうと思ふけど、行つても宜いでせう」

鼻聲の甘つたれた調子で今年十九のマーベルさん、親御さんの甘いのを宜い事にして我儘方題仕方題、十五六の小娘のやうに鼻を鳴らしてせがみ立てる。

眞黒な漆のやうに綺麗に光つた長靴を穿いて、房々した金色の髪

毛が鳩の胸毛のやうに柔かくつて滑つこい頸足に懸つたマーベルさんの立ち姿はなかく、以て美しい。

「今日は、御免下さい、誰方かお在でございませぬか？」

戸外の方で誰か案内を乞ふ聲にマーベルさんのお父さん、棕櫚箒のやうな頸髻を両手でしごきながら扉を開けると、これは近所のお出額で通つたフレッドさん、

「ヤ、誰かと思つたらフレッドさんかい、扉を叩くのは宜いが人の鼻まで叩かなくなつたつて宜いちやないか、粗忽しい人だ」

「眞平々々、つい外方向いて扉　て居たもんですからお父さんの鼻まで叩いちまつたんで——マーベルさんはお在ですか？」

「ウン、居るよ、まアお這入り」

「やア、フレッドさん、今日は」

「アラ、お出額のフレッドさん、何處へ、お化粧して——」

「こりや驚ろいた、顔を見る早々、お出額のフレッドさんは、マーベルさん、些と厳しうございますねえ」

「でも貴郎のお出額はもう誰れでも知らないものはありやしませんわ宜い格好だつて評判だわ」

「ウフツ、冗談ぢやない、お出額の宜い格好つて余り聞いた事はありませんせ、その位の柵卸しをされ、ば大抵たくさんだ、時に貴女こそ綺麗な他所行きの服装をして何處へお出でぞす？」

「遠乗り」

「へエ、そいつは面白いでせうな、どうです、お供をさしてくれませんか」

「エ、どうぞ」

マーベルさん、お出額のフレッドさんなんかと一緒に遠乗りに出るのは嫌だが、さう情なく、遇はれず、二人揃つておん馬の鼻を並べて是から遠乗りと洒落れる、目許はつちり鼻高で櫻色をしたマーベルさんの頬ぺたにゾツこん参つてるお出額のフレッドさん、せいせいマーベルさんの御機嫌とりくおん馬に乗つたが、扱てなくづしにポカ／＼歩いて面白くない、此奴一番駈け出して、まア、フレッドさん

はお上手ねえとでも云つて貰はうと止せば宜いのに、

「どうですマーベルさん、一つ駈けつこをやらかさうちやありませんか、ポカ／＼おん馬に歩かして居たつて始まらない、日が短かうござんすからなア」

「エ、そりや面白いわねえ、ちや宜ござんすか、競争よ」

「オット待つたり、斯うお尻の下へハンケチをかつて置かないと痔になります、さ、宜ござんすか、一二三——」

拍車を入れてトウ／＼トウ、鼻を並べておん馬は駈け出した、幸か不幸かフレッドさんのおん馬が少しマーベルさんのよりも先へ出たから占めたツてんで圖に乗つたフレッドさん、自分のお臀でないから宜

いやうなもの、ピシ／＼おん馬のお臀を鞭で叩き始める、おん馬こそ
宜い面の皮で痛いから一足飛びに風を切つて勢物凄くも、タツタツタ
ツ、砂煙りを揚げて駈け出した、自慢はしたものの、素より余りお上手
でないフレッドさん、斯うなると腰の工合が甚だ以て危くなつて来た
慌て、手綱を引き締めたが惜しや時は既に遅しで、スツテンコロリ、
地響打つて芋虫のやうに物の美事に轉り落ちる。

「待つた／＼、マーベルさん」

澁面つくつて起き上つたフレッドさん、泣く／＼腰を擦つて梅毒患
者が横痃を踏み出したやうな格好で、おん馬の手綱を引きながらマー
ベルさんの後を追ふ形は無残といふも愚かなり。

此方はマーベルさん、フレッドさんに負けてなるものかと夢中にな
つておん馬のお臀を叩いたが、先へ行くフレンドさんが小氣味のいゝ
ほど鞍の上から投げ飛ばされたのを見て流石におん馬を停めやうと思
つたがさア今度はおん馬の方で云ふ事を聞かない、あんまりお臀を叩
かれたので怒つちまつたのか、意地になつて駈けるは／＼、無茶苦茶
に鬣を振つて盲滅法眞闇三界に泡を吹いて物凄いやうに駈け出した、
斯うなると何と云つてもマーベルさんも女だから怖くなつて思はず、

「アレーツ」

とばかりおん馬の頸に叩きみついて顔の色も何處へやら齒の根も合は
ぬガタ／＼慄ひ、落ちたら最後の介、花の十九を名残りに落花微塵と

なるばかりだ、流石お轉婆のマーベルさんも魂天外にフツ飛んで、ア、天の神様よ——を百遍ばかり勘定した、すると、

「大丈夫だ、しつかりおしなさい、今たすけてあげる！」

まさに是れ天來の福音、ハツと思ふと降つたか湧いたか一人の男がマーベルさんのお唇へ噛りついた、驚いたのはマーベルさん、

「出齒龜ッ！」

と危く口まで出かゝつたのをグツと抑へて、それでもホツと一息、やうやく我れに復つて弛んだ手綱をグイと一ト締め轡を當てたので命だけは先づ助かつた。

死んだやうになつておん馬から下されたマーベルさんは何處の誰方

か知らないがテモ亦御深切なお方もあつたものとお禮もしみく、有り難う存じますの百萬遍、

「お名前を——」

と聞くと、ジョン、アントニー、ジョーンス、おん馬のやうに顔は長いがお出額のフレッドさんよりはまだ好男子だ、クレスト旅館とお宿を聞いて、

「いづれ父親と一緒に此のお禮に上ります」としんから厚くお禮を述べる、

「いやなに、それには決して及びませんよ、何ね、丁度あそこを自働車で通り掛りますとね、貴女がおん馬の首に獅噛みついて駛つて來

るでせう、是れは危いと思つたんで一寸自動車からお馬へ飛び乗りの余計なお節介をしたまででなんで——」

厭味のない齒切れのいゝジョンさんの挨拶に、まア深切な好いたらしいお方！と思つたかどうか兎に角味な目附き色附きに意心傳心ジョンさんとマーベルさんの心と心に變な電氣が通ひ始めた。

一筆啓上、甚だ唐突な申し條ではございますが貴郎は若しやセービルさんの御子息ではございませんか、若しセービルさんの御子息だとすると貴郎と私共の娘マーベルとは幼い時から互の親と親とが許した約婚の間でございますから、本日午後、拙宅まで御足勞の程願

はしう存じます。

マーベルさんが危く馬から落ちさうになつたのを助けてやつた翌日の朝、思ひも掛けない斯う云ふ手紙がジョンさんのクレストホテルへ届いた、約婚があると云ふ事は豫て聞いて居たがどんな娘だか一遍も顔を見た事がないので美人なのだかお福面なのだかジョンさん一向に見當がつかない、自分と約婚の娘だから顔も見たいのは山々だがひよつとお福面や盤若のやうなどえらい娘にでも打かつた日には取り返しがつかない、と云つて昨日助けてやつたやうな綺麗な可愛い娘さんで、もあつてくれ、ば願つたり叶つたりだが兎角世間といふものは意

地の悪いものだから、うつかり此の招待には應じ兼ねる、併し招待状を突きつけられて厭だと断るのも今更敵に後を見せるやうで甚だ意氣地がない、自分が娘の約婚だと云ふ事が知れないやうに何とか娘の顔を見る巧い工夫はないものかしら——とジョンさん暫らく小首を捻つて考へた末やがてボンと膝を叩いて早速お供のセンネットを呼び出した。

「おいセンネット、實は今俺のところへ斯う云ふ手紙が來たんだが俺は未だ此の娘の顔を見た事がないんだ、こんな招待に行くのは厭だが行かないわけにもいかないからお前に此の約婚のお株を譲るが、どうだい、お前と俺と一ツ役柄を反對にして行つて見やうぢやないか」

「役柄を反對にするつてえと私が旦那になつて旦那が私になるんですね」

「さうだ、それで先方の娘がどんな娘か知らないがお前に譲るから一ツ此の役を巧くやつてくれ、俺はこんな約婚なんかどうでも宜い、昨日馬から助けてやつたあの娘さんの事が氣に懸つて仕様がなからお前に此の約婚をやる」

「有難い、旦那きつとですせ、善は急げ、直ぐ行きませう」
待て、その服装ぢやいけない、俺のモーニングとシルクハットを貸してやるからウンとお仕粧をして行け、俺はお前の着物を着て

此の荷物を持って行くから——」

喋り合せたジョンさんとセンネット、是から身支度をするにホテルを飛び出した。

マーベルさんは昨日自分が助けて貰つた深切な男が思ひも寄らない自分の約婚の男だと聞いて嬉しくつて堪らない、馬から落ちさうになつたのわあの人が後から飛びついて妾を助けてくれたんだが、道理で尋常の男に飛びつかれたやうでもなく妙に腰のまわりが變に櫟つたかつた——まさか其塵なこともなかつたが兎に角ジョン、アントニー、ジョーンスと云ふ人に助けて貰つたと父親に話すと、それこそお前と婚約の男だと始めて明された嬉しいやうな極りの悪い話し、さうと知

つて居たら何とかお禮の云ひやうもあつたのに——今日來たら澤山お禮を云つてやらなきや——と氣もいそぐと朝から風船玉のやうに浮ついて居る。

然うとは知らない此方は二人、玄關から先づ「頼まう」と大きく出る、今かくとやつて來るのを待ち構へて居たマーベルさんのお父さんとお母さん、

「そりや娘の婿が來たぞ」

と云ふので早速二人を出迎へる、マーベルさんは流石に極りが悪いので窓掛の蔭へ小さくなつて隠れる、ジョンさんのモーニングを借着してシルクハットをちよこなんと頭の上に載たセンネットの大將、是れ

見よがしに意氣揚々と、のさばり込んだは宜いが、山家の猿が花のお江戸へ戸惑ひ込んだやうな物の應對は未だしも帽子を頭の上へ載けた儘突如チュツ！と牛蝨が食ひついたやうな格好をしてマーベルさんのお母さんの頸ツ玉へキツスした。

お供に化けて来た旦那のジヨンさん、氣が氣ぢやない、背向からセネットのお臀を突ついて「帽子をとつて氣をつけろ」と頻りに目顔で合圖をするが、神経の鈍いセンネット先生一向に感じない、一トわたり挨拶が済んでしまふまで帽子を被つたまゝ、やがて主人夫婦の導くまゝノコノ奥の間へ通つてしまふ。

やつとの事で帽子をとつたので、やれ〜とジヨンさんがホツと一

ト息つくとも今度は例の金魚鉢へ寄つ懸つた、行儀のわるい事をする奴だと思つてゐると、金魚鉢へ寄つ懸つたまゝフワリ〜と體を揺り始めた、小脇に抱へた帽子の中へ水がワシヤ〜と滴れ込む、オヤ〜大變な事をする奴だと思つて見て居ると、御當人氣がつかないから又ぞろ其の帽子を頭の上へ載た。

「ワツ、こりや大變、助け船だア！」

頓狂な聲を出してセンネット先生、濡れ鼠のやうになつて飛び上つて驚ろいた。

窓掛の蔭のマーベルさんも此の聲におどろいて叱驚おもはず其處へ飛び出して來ると、這個ツ。

好いたらしいと思つたジョンさんの長い顔とバツタリ、

「オヤ貴郎は」

「ヤツ貴女は」

濡れ鼠のやうなセンネット先生、是を見ると様子を知らないから、計略はれたりとも思つたか、

「コリヤ家來、家來、何をウロ／＼しちよるんだ早く拙者の水を拭け拭かんとあらば貴様の尻をどやすぞ！」

大變な旦那様だ、ジョンさん極りが悪くなつたから堪らず二階の階段を駆け上つて室の中へ横ツ飛びに逃げ込んだ、センネットの大將も續いて飛び込んで來たのを、慌て、扉をガチクリン閉めて、

「オイ／＼、センネット何て事をするんだ、貴様は、もう旦那の役は取上げだ、さ、此の着物と其の着物と取り變へッこだ、馬鹿野郎め」此方はマーベルさん、折角好いた男と會つたと思ふと豈圖らんや肝心要めの約婚の男と云ふのは山猿のやうなヘチャムクレナ男なので、昨日自分が助けて貰つた男はあれは偽物である山猿のお供かと思ふと急にながかりして腹が立つやら口惜しいやら、癩に障つて堪らないのでパイと戸外へ飛び出してしまつた。

馬から落つてしたゝか腰の骨を痛くした例のお出額のフレッドさんやうやく腰の骨も癒つたので今日あたり一ツ海岸でも散歩して來やうと一人ブラ／＼のテク／＼歩き、大切な戀の相手のマーベルさんが居

ないから甚だ以て張り合ひがなさうだ。

「可愛々々のマーベルさん、今頃は何處にどうしてござるやら、きくらしい／＼きんもうらい」

流行の都々逸かなんか唄ひながら浪打際の磯づたひをやつて來ると不圖遙かの岩蔭にチラリと見える見覚えの袴、淡桃色のスカートは紛れもないマーベルさんのスカートだから見損つては男冥利に盡きる、腰の骨の未だチク／＼痛いのも何も忘れて忽ち有頂天になつたフレツドさん、交尾のついたブルドックのやうになつて、

「イヨウこれはマーベルさん、今日はお一人で御散歩ですかい、一寸知らせて下さればお迎ひに上つたものを……」

腐つた鰻の腹みたいに其のうじやじやけた顔つたら——マーベルさんの腰を掛けた岩へ一緒に腰を掛けながら頻りに頭を撫でたりお臀を撫でたりしながら、

「どうですマーベルさん、斯うして二人並んだ處はどう見ても似合の若夫婦ですな、逆もの事に之れを一ツ實地に行かうぢやありませんか？」

尺蠖虫がだん／＼伸びて行くやうに、いやにマーベルさんのお尻の方へ狙ひをつけて、フツンドさんお臀を持つて行く。

マーベルさん、氣がムシヤクシヤして居るところへ大ばちもないフレツドさんの此のお臀だから愈々以てお腹の虫が納まらない、

「何をするんですよフレッドさん、冗談も大抵におしなさい、いけすかないツちやありやしないよ、ほんとに——」

切長の目尻にツンとしたところを見せた格好、拗ね案配が殊にいゝ、
「まあさ、そんなに怒らないだつて宜いちやありませんか、私だつて何も是れでそんなに捨てたもんぢやありませんせ、第一この……」
「宜ござんすよ、何でも宜いから早く彼方へ行つて下さい、私今日は氣がムシヤクシヤしてならないんだから……」

「オヤ／＼、馬鹿に劔もホロ、の御挨拶なんですわね、ですがねマーベルさん、物は相談だが、どうです、ほんとに私の細君に一ツなつてくれませんか、随分可愛がつてあげますせ」

「厭な、誰が貴郎になんぞ！」

「是は怪しからん、苟も貴女に満身の愛を捧げてゐる私に對して其の御返事は甚だ穩當でありませぬ、どうしても私の細君になるのは厭ですか」

「くだいわよ」

「フーン、くだいと云ふのは厭だと云ふ事を意味するのですな、宜しい、斯うなれば私も男だ、可愛さ余つて憎さが百倍、此の上は貴女を此の岩へ踏ん縛つて潮が上げて來ても構はず放つて置くがそれでも宜ござんすかね」

「どうとも御勝手になさいまし、妾貴郎にはもう口を利のも厭！」

フレッドさん、美事に肱鐵を喰つた、而も強藥の二ツ弾と来ては綺麗さつぱり二の匂も繼げない、評判のお出額の上へ蚯蚓のやうな青筋を出した振られ男のフレッドさん、とうとう勘忍袋が破けたと見えて疝癪弾が破裂した、突然傍にあつた細繩を拾ふより早くグルグル巻きにマーベルさんを件の岩へ雁字搦みに縛りつけてしまつた。

「アレーツ、誰方が来て頂戴、助けてエ——」

金切聲を出したが浪の音が高いから四邊へ通らない、おまけに生憎上げ汐どきと来て居るので水が早や足許までビチャビチャつて来る。

振られ男のフレッドさん、よくよく腹が立つたと見えてズンズン行つてしまふ、マーベルさんも流石に驚ろいた、頻りに助けを呼ぶが浪

の音が高いので人の耳に這入らないが誰も見えない、水は遠慮なくドズンズン上つて来る、ビチャビチャ、足許ぐらゐだつた水は何時か膝となり腿となり、とうとう胸のあたりまで上つて来てしまつた、浪は頭からドシヤンと瀧のやうに被さる、手も足も動かないのでマーベルさん、目ばかりバチクリ、口を開いた儘でアブアブやつて居る、マーベルさんの命は將に風前の燈火といふ危い段取になつた、打捨つとけば否でも應でも水膨れの土左衛門と改名しなければならぬ。

浪はドシヤンと到頭岩の上を越しはじめた。

センネットの重ねぐの失敗に二階の一室へ逃げ込んだ此方は例の

ジョンさん、不圖何氣なく窓から下を見おろすと遙かの濱邊にマーベルさんの容易ならぬ椿事！

慌て、二階を降りやうとしたが、階下にはマーベルさんのお父さんやお母さんがセンネットの失敗に腹を立て、降りて來たらしめてやらうと心張棒を片手に待ち構へて居るので降りるにも降りられないと云つて愚圖々々してる中には可愛いマーベルさんの命があん様の様子は長い事はないらしい、兎やせん角やせん彼方へウロウロ、此方へウロウロ、戸惑ひした鼠のやうに一ツ室の中をセンネットと一緒にチヨロウマゴウウやつて居る。

と、天の與へか目に這入つたのは大きな一本の蝙蝠傘

「占めたツ、有難いッ！」

忽ち窓から颯々乎として飛び出したジョンさん、バツと開いた傘の柄にブラ下つた儘、天空遙かにブランコく珍妙不可思議な飛行を始めた。

風の加減が幸ひに傘は次第々とマーベルさんの方へ近寄る、時分は宜しと頃合を計つたジョンさん、思ひ切て傘の柄の手を放す、ヒュウと風を切つたジョンさんの體は筋斗うつてマーベルさんの縛られて居る岩の直ぐ傍へ落こつた。

マーベルさんの命は幸ひにジョンさんの冒險飛行に依つて難なく助

かつた、センネットの失敗に危く破談になりさうだつたジョンさんの戀も二人の縁の盡きない處か傘が取持つ縁かないなで茲にめでたく思ひが叶つたと云ふ活喜劇、題して「マーベル嬢日傘飛行」これを以て終りと致します。

ハムの賣卜者

一 小春日和のポカ〜とした暖かい日の午後のことである、ハム公とチビ公例に依つて例の如く何處をどう戸惑ひ込んだかジブシー(乞食)連中の部落へ這入り込んだ、

野天に樹の枝で櫓を組んで大きな鍋が自在鉤に吊してあるので、見ると甘さうな芋が中でクタ〜煮えて居る、

「チビ公、一寸見な」

「何でえ兄哥」

「何でも宜いや、一寸見な」

「芋ぢやねえか」

「さうよ、誰も其處らに見て居やしめえな」

「ウン、居ねえよ」

「藝當は此の通り——ア、熱ッ！」

「意地の汚ねえ兄哥だなア、大きな體をして」

「箆棒め、大きくつたつて食ひてえのは同じだ、手前そんな行儀のい

い事を云つて喰ひたくなきや與らねえぞ」

「一寸聞くがね兄哥、その芋は誰のだい？」

「ウム、此の芋か、此の芋はその何だ、此の鍋の中の芋だ」

「鍋の中の芋は誰だつて見りや分る、瞞着しちやいけねえ兄哥、人の

芋を見て喰ひたくなきや與らねえぞ——は餘り虫が宜すぎらア、ウ
フツ、ちやんちやらお可笑いや」

「生意氣いふな」

「オヤ、兄哥、俺の尻を蹴つたね」

「蹴つたとも、蹴つたらどうした？」

「斯うする」

「チビ公もなか／＼負けて居ない、小さい體をして大きなハム公の素
敵もない大ばちな尻をウンと蹴飛ばす、

「オヤ、チビ公、今日は手前なか／＼味をやるな」

「ちやんこな踏ん反りかへつて胡坐をかいた鼻をムク／＼ツとおや

かすと、ハム公いきなり薪ざつぼうのやうな腕に力を籠めて、グワンとチビ公を撲り倒す、小さなチビ公一ト堪りもなく飛んでもない處までけし飛んでジブシーの天幕の中へ轉り込んだ、

「ヒヤツ、人が降つて来たぞ」

ジブシーも驚ろいた、天幕から首を出して見るとハム公が一人でムシヤク／＼やつて居る、

「オーイ、みんな来い、みんな来い、乞食の上前をとる奴が出て来たぞ」

「何だ乞食の上前をとる、太え野郎だ、殴つちまへ」

「撲り倒せ」

「何奴だ／＼、俺達のかすりを奪るなんてのは」

「ドヤ／＼、彼方の天幕からも此方の天幕からもジブシーの連中が飛出す、」

「ヤツ、失敗つた、發見つたか」

ハム公、食ひかけの芋を慌て、ポケットへ押し込んだが口の中の芋の遣り場に困つた、目を白黒にして大きな涙をポロ／＼滴しながら辛との事で嘸み込む、

「ナニ何でもねえんだよ、ホレ、見ねえ、此の通り何にも食つちや居ねえだらう、俺達だつてお前達の仲間なもの、黙つて芋なんか摘みやアしねえ、此の二三日虫歯でなア——」

顔を顰めてハム公、さも痛さうに頬ぺたをおさへる、

「さうか、お前俺達の仲間だったのか、新入だな」

「ウム、今日入つたばかりだ、今入りたてのホヤ〜だ」

「何だ仲間なのか、乞食の上前をとる奴が出て来たつてから、俺や又世の中にや上の上を行く奴があるもんだと思つて感心して居たところだ」

「済まねえな、大きに有難う」

圖々しいハム公め、巧くちよろつとちよろまかしてしまつた。

「おいチビ公、どんなもんだい、ヘツ、見や！」

ジブシー連中が天幕へ這入つてしまふとハム公、ポケットから食ひ

かけの芋を出してムシヤ〜ばくつき始めた、チビ公、撲されたり見せびらかされたり業腹で堪らない、

芋を喰つてしまふとハム公、ジブシーの新入りだと云つたので今度は公然に傍の天幕の中へ潜ぐすり込んだ、中には誰も居ないで大道賣卜者の衣装だけがある、

「オヤ〜、大將家を留守にして何ツ處へケツかつたと見えるな、占め〜、おいチビ公、どうだい似合つたらう、立派な賣卜者と見えるだらう」

「違えねえ、第一、面が乞食賣卜者にお誂ひむきだ」

「冷かすな、此ン畜生、撲るぞ」

ハム公、賣卜者の衣装をつけてお得意になつて居ると思ひ掛けなく
其處へ立派な紳士がやつて来た、

「オイト、賣卜者」

「何か占ひますかな」

グツと反り身になつてハム公一廉の賣卜者に成り濟す。

「他でもないがな、少し易て貰ひたい事があるんぢやが……」

「ホ、ウ、何かお考へに余りましたかな」

「實は少し云ひ難い事ぢやが、儂の女房の事に就いて易て貰ひたいの
ぢやが、見料は幾らでも出す、一ツ確なところを易つて見て呉れん
か」

「宜しうございますとも、當るも八卦、當らぬも八卦とか能く申しま
すが、不肖ながら拙者の易ひばかりは大地を打つ槌と同じ事、當れ
ばとて決して外れるやうなそんな易ひとは違ひますから御安心を願
ひます、——して御女房様のどう云ふ事を易ひますかな」

「儂の女房がどうも近頃ゾロついて居て困るんぢやが、どうぢやらう
色男でも出来て居やせんだらうか」

「成る程、それは些と六づケ敷いですな、一體貴郎の御女房様はお幾
歳ですな」

「丁度三十三ぢや」

「御容貌は？」

「素敵な別嬪ぢやよ、イヒツ」

「判りました」

「ホウ、もう易へたか、馬鹿に早いな」

「貴郎の頭の禿茶瓶な工合といひ、引垂れた目尻の工合といひ、出ツ
臀、鳩胸、獅子ツ鼻、それで御女房が別嬪と来ちや是れや差し當り
どうしても色男が出来ずにや居ませんな、所謂口直しと云ふ奴でな
つまり何ですな、貴郎のやうな化物みたいな厭な——イヤその何で
例へてみれば駄鹽つ辛いものを喰た後で甘い羊羹か何か抓んでみた
いやうなもんで、一寸おつな口直しつてツた工合で、若いハイカラ
な小粹な男と、貴郎やつてつた調子に戯れるですな」

「怪しからん奴ぢや、之れから直ぐ行つて重ねて置いて四ツにして呉
れる」

「まア、旦那、お待ちなすつて、後を聞かないぢやいけません、後を
——、急いで事は仕損ずんでな」

「ぢやが怪しからん奴ぢや、腹が立つて堪らん」

「其處です、そこで拙者が宜い方法を貴郎にお聞せして上げやうと云
ふんで……」

「ウム、どんな方法ぢやな、引捉まへて田樂刺しにして味噌漬にでも
するか」

「冗談云つちやいけません、茄子や南瓜ぢやあるまいし——、併し旦那

那、いづれ何でせうな、お禮の所は澤山下さるんでせうな、聞いちやつてから銀貨一枚ぐらゐで追ッ拂ひぢや拙者の稼業になりませんからなア」

「心配は要らん、儂も紳士ぢや」

「有難い、さうと聞けば拙者も安心、では手ツ取ばやいとこ論より證據、今日夕方から旦那お家を留守になすつて置いて下さいまし、そして晩の六時を合圖にお歸りなすつて下さい、若し御女房が着物を差替へてお化粧をして居たら確かに色男が忍び込んで居る證據ですから、構ふ事はありません、引き摺り出して取つちめておしまひなさいまし、拙者の云ふところが嘘か眞實か、當る八卦に當らぬ八

卦、生きた證據を御覽になつた上、重ねて置いて四ツにするなり、田樂刺しにして味噌漬にするなり、後の始末は又拙者が追つて詳しくお話しいたしますから兎に角お禮のところを何分一ツ澤山と願ひたいもんでエへ、へ、——」

「宜し、當つたらお前に此の紙入れをソツクリやる」

「エへ、有難い」

「では今夜の六時ぢやな、嘘を易ふと承知せんぞ」

「大丈夫、大地を打つ〇によし外れがあつても拙者の易ひに外れはありません」

牡丹餅大の判を捺したやうな挨拶、甚助紳士、ハム公の出鱈目とは

知らないから目尻の引垂れたのを今度は逆に釣上げて歸つて行く、

「さア、チビ公、喜べ、甘い仕事にありついたぞ」

「止せやい兄哥、嫉妬のチン／＼野郎に詰らねえ余計な水なんか注して罪な事をするない、俺ア傍に聞いて居て兄哥の出鱈目にハラ／＼して居たせ」

「へッ、又お株を始めやがった、手前のやうに、然う膽ツ玉が小せえから甘え仕事が出来ねえんだ、さ、儲けは山分けた、何でも宜いから此の仕事に半口乗つて俺の云ふ通りになつて居な」

一人で乗り氣になつて、ハム公、是れからチビ公を引張つて早速古着屋へ飛び込む、有合せのモーニングを、行オの合ふも合はないもな

い、頭からチビ公に押被せて、甚助紳士の名刺に書いた番地を目宛にスタコラ／＼、

「おい、チビ公、手前一寸／＼に待つて居な、今俺が直きに呼びに来るから……」

「おい／＼、兄哥、俺を斯様な立關先へ置いてきぼりにしてどうするんでえ、變な役は御免だせ」

「文句を云ふな、黙つて待つて居ろ」

ハム公、賣卜者の衣服を着たまゝノコ／＼家の中へ這入つてしまふ「イヤ、これは此方の奥さんですか、拙者は賣卜者でございしますが、一ツ如何でございします、見料は思召しの儘で宜しうございしますが……」

…

「まア、何です、人の家へ黙つて這入つて来て……圖々しいんですねえ」

「併し泥棒ちやありませんから御安心を願ひます、如何です、何か一つ易はせて頂きたいもんで」

「賣易の押賣りツて、一寸、あんまりない圖ね」

「エへ、へ、お戯かひなすつちやいけません、何でも必と當て、御覽に入れますから一ツ如何で」

「折角だけれど何にもないから又今度……」

「でもございませうが其處をどうか」

「仕様がないのね、ちや何でも宜いからお前さんの易ひたい事を易つて御覽なさい」

「畏まりました」

ハム公、してやつたりと目を閉つて暫らく鹿爪らしい顔をする、

「奥さん、もう十分経ちますと六時になりますな」

「まア、いやだ、馬鹿におしでないよ、そんな事は時計を見りや誰にだつて分る事ぢやないの」

「イヤ、易ひの妙所はそれからです、もう十分経つと六時になる――

そこでいすな、今から五分経つと珍らしいお客來があります、そのお客は奥さんに取つて非常に大切なお客でございますから是非とも

奥さんにお召替への必要がある事と拙者は存じます、嘘か本當か物は試し、瞞されたと思つて一ツお召替へを願ひたいですな」

「面白い事を云ふのね、お前さんは——、實は今日は亭主は一日出たッ來りなので妾一人で退屈で氣がクサ／＼してならないんだが着物でも着替へたら氣もサバ／＼するかも知れない、それぢや瞞されたと思つて一ツ着物を差替へて見ませうかね」

氣輕な奥さんもあつたもので酔狂にハム公の云ふ通りになつた、案ずるよりは産むが易いのでハム公占たとばかり、奥さんが着替へに立つた隙を狙つて大急ぎでコツソリ玄關口のチビ公を呼び込む、
「チビ公、甘く行つたぞ、金儲け／＼、何でも宜いから手前は黙つて

俺の云ふ通りになつて居なくつちやいけねえぞ、宜いか、今此處の家の女房が出て來るから、出て來たら鹿爪らしく眞面目な挨拶をするんだ、何とでも宜い、宜い加減な出鱈目を云つて置け、五分間ばかり間を手前が繼いで置けば宜いんだ、それで手前の役は濟むんだから……それから先は俺が巧く一ツ芝居を打つから手前はたゞ相槌だけ打つて居ろ、宜いか、失敗を踏むな」

「一體兄哥どうしやうツてんだ、此の幕は」

どうも斯うもねえ、手前が此處の家の女房の色男になるんだ」

「ブツ、冗談ぢやねえ、止してくれ、此處の女房つてのは何だらう、先刻の禿茶瓶の甚助爺の女房さんだらう、重ねて置いて四ツにされ

たり田樂刺にして味噌漬にされたりしちやア堪らねえ、俺やア御免蒙るよ此の役は——」

「笹棒め、今此處で手前に止されて堪るけえ、そのモーニングの資本も取り上げねえで尻を捲られて合ふ話ぢやねえ、何でも宜いから俺の云ふ通りになれ、ならねえと手前その分にしちや置かねえぞ」

「ヘツタクレヨイ、脅し文句は置いてくれ、兄哥の打つた芝居で満足に幕のしまつた例しがねえんだからなア——」

「生意氣いふな」

——チン、チン、チン、チン……

「そりや六時だ、禿茶瓶が来るぞ、氣を付けろ」

此方は例の甚助紳士、焼餅のチン／＼で逆上あがつて居るからハム公の出鱈目をスツカリ眞に打けてしまつたと見えて六時の合圖を待ち遠に家の中へ飛行機のやうに飛び込んで来た、見ると是れも酔狂な禿茶瓶の女房がハム公の云ふ通り着物を着かへて丁度自分の居間を出て来たところ——

「己つ！ 太い女だ、そこ動くな」

火の玉のやうになつて禿の焼餅、いきなり女房の鬘を持つて其處へ引き摺り倒した、驚ろいたのは女房だ、

「アレーツ」

と云ふと目を眩しちまつた、

「どうです旦那、拙者の易ひは——」

「してやつたりとハム公そこへ飛出す、續いて憶病なチビ公、アレーツと云ふ金切聲に意氣地のない奴で慄え上がつて一緒に其處へ飛出した、

「ヤツお前は先刻の……」

「イヤ、これがその色男なんで……」

「幾ら逆上あがつても先刻の今だから甚助紳士、流石にチビ公の顔を未だ覚えて居る、

「イヤ、これは先刻お前と一緒に居た男ぢやないか、色男は何處に居る」

ハム公、しまつたと思つたが圖々しい奴だから、

「ナニ、これが色男なんで……」

「馬鹿を云へ、これは先刻お前と一緒に居た小人ぢや、第一、これでは、些ともお前の云つた様な色男らしくないぞ」

「イエ、ナニ、これがその色男なんで……」

云つてるところへ悪い事は出来ないもの、ハム公に賣卜者の衣服を看逃げされた先刻のシブシー連中、何處をどう探し當てたか

「居たく、着逃げ野郎の盜賊が居たぞ」

「しめた、捉かまへろ」

「此の大詐譎野郎め、逃がすな」

ワイ／＼云つて窓の外へ寄つて来た、圖々しいハム公も斯うなつては堪らない、失敗つたと思ふと行きがけの駄賃に甚助紳士の尻をウンと蹴飛ばして、三十六計後白浪の賣卜者物語、題しまして「ハムの賣卜者」と云ふお笑ひ寫眞、之をもちまして結局といたします。

マーベルの先生

—

美人でお馴染の深いマーベル嬢は、月給は少いが、世の爲め、又自分の天職を完ふしようが爲め、殊勝にも、或る町の、小學校の女教員をして居りました、大層生徒間の受けもよく、町の評判も好かつたのでしたが、郡長の命令で、急に、十二三里離れた、片田舎のグリーンカッターといふ學校へ轉任を命ぜられました。

併し、一旦先方へ行つて見た上で、又日曜にでも歸つて來ようと思ふものですから、ホンの寢衣一枚を鞆に入れ、此方の校長から先方の

校長への紹介状を貰つて、

「夫ぢや皆さん行つて参ります」

同僚の女教師や男教師なども四五人、校門まで送つて呉れて、

「御機嫌克う、是非今度の日曜日には入つしやいな」

「はア、用事をかけて是非参りたいと思ひます、いづれ其節……」
互ひに握手を交して、

「グードバイ」

「左様なら……」

マーベルさんは此町を出て、汽車の便をかりて、目的の田舎の小學校をさして急ぎました。

急ぎ候ほどに、田舎の小學校近くなつた。

「汽車を降りて直きだと聞いたが、マア随分あるんで、勞れて了つた……ア、彼所に見えるのが、さうらしいわ」

足を早めて近付くと、校庭といふて、別に區別がしてある譯でもない、全たくの田舎の學校で、校舎の前も後ろも、大きな芝原で、其芝原には、刈草や、農作物の麥などが積まれて、ところづくに山を成して居ます。

今し、マーベルさんが近付くのを見た、生徒達は、折柄、遊戯中であつたので、三々伍々に遊んで居たが、直ぐに此の珍らしい來賓の方へ走つて來ました。

茲に斷わつて置きたいのは、此の生徒達の中に、圖抜て丈の高いのと、圖抜て大きい涎くりが居ます、是こそ一人はデブ君であり、一人はノツボ君であります、生徒に扮して、大いに滑稽的活躍をするのです。

マーベル嬢は目早く見つけて。

「鳥渡生徒さん達、校長さんの在つしやるところへ案内して頂戴な」

「ヤア、綺麗な先生だなア、今日から此の學校へ來たんでせう」

「さうですよ、今日から皆さんに教えるんです、校長さんのところへ案内して頂戴な」

「此方ですよ」

生徒は先に立つて案内をする、マーベル嬢は應て校長の室へ入つて來ました。

校長といふのは、頭の禿げた、年頃六十二三にもならうといふ、老人でした。

「妾はマーベルといふものです、貴下が校長さんですか」

「イエス、然うですよ」

「どうぞ此の手紙を御覽下さいまし」

「ア、さうですか」

眼鏡をかけて、手紙の封を切り、透すやうにして見て居たが、

「ア、貴女が新教師のマーベルさんですか、夫はく御苦勞さまで

したね、何しろ御覽の通りの田舎の學校ですから、設備も不足して居るし、都の學校においでゝは、鳥渡辛抱が出来にくいかも知れませんが、せんよ第一生徒があげればかりでね」

「イエ、妾も可成經驗がございますから、大體なら辛抱が出来やうと思ひます」

「さうして、此の手紙は、彼の校長からちやつたが、彼の方も御壯健かな」

「ハイ、大層御壯健で、近頃は、馬に乗つて、時々遠方までおでかけになぞなります」

「左様かね、そりや結構ぢやつた、何は兎も角、手が不足して居るとるノツボ君と、其後の側に居るデブ君の二人が、帽子を被つた儘、平氣でお座について居ました。

「アラ、仕方のない行儀の悪い生徒だ……デブさん」

「はい」

「はいちやありません、お座に着いたら、帽子をお脱んなさい」

「はい」

「ノツボさんもさうですよ」

「はいッ」ノツボ君は直ぐに帽子を取つて、チヨイと、マーベル先生の教壇の上へ載せました。

「何故、茲へ載せるんです」

先生が叱言を言つて居る中に、デブ君もノツポの眞似をして、チヨ
イと前の机の上に帽子を置く氣になつて、手を伸すと、生憎、ノツポ
君の頭の上へ被せて終ひました。叱言をいつて居た先生の方が驚ろき
ました。

「何です、又帽子を被つて……」

「私は被りません」

「御覽なさい、被つてるぢやありませんか」

ノツポ君、頭に手をやつて見ると、成程、天から降つたか地から湧
いたか、何時の間にか帽子が載つて居ます、取つて見ると、豈圖らん
デブ君の帽子。

ころですから、赴任早々お氣の毒ぢやが、此の次の時間から生徒の
面倒を見て貰ひたいと思ひます」

二

總て時間が来たので、直ぐに教鞭を執るべく、マーベルさんは、大
きな振鈴を、教場の入口に佇つて、振りますと、此の音に、校庭や、
其他に遊び戯れて居た學童は、忽ち集まつて來て、列を造つて、級長
に續いて、男も女も、教場内に入つて行く。

其列の最後が、デブ君とノツポ君の二人です、二人とも大きな聲を
出して、

「オイチニイツ、オイチニイツ、オイチニイツ……先生薬罐の禿あたまッ……」

マーベル先生は、是を聞きつけて、

「何誰です、先生薬罐なんと仰しやつたのは」

デブ君もノツボ君も、

「私ぢやありません」

「私ぢやありません」

「オイチニイツ、オイチニイツ」白ばくれて入つて行きました。

教場へ入ると、マーベル先生は、黒板の前の教壇に立ちました、片手に二尺ほどの教鞭を持つて居ます、フト見渡すと、一番前の側に居

「先生、これは、私のぢやありません、デブさんのです」

「何故、他の帽子を被るんです」

「アレ、私が知らない中に、何時か被つて居たんです」

「そんな筈はありません、自分の頭へ被せられて知らないなんて……誰です、クス／＼笑つて居るのは、デブさんぢやありませんか、デブさん、あなたが被せたんですか」

「私知りません」

「嘘を仰しやい、後から被せたんでせう、そんな事をするると、此の次の時間に遊ばせませんよ、サア温順くしてお稽古をするんです」
デブ君とノツボ君の二人は、大きな聲で、足をバタ／＼やりながら

吐鳴り出しました。

「ウーラの畑に茄子うえて……」

マーベルさんも、此の腕白の茶目二人には、殆んど閉口して了ひました。

「何故、そんな歌を唱ふんです」

「ハイ、それぢや他のを唱ふんですか、親父や俺より年が上、高い山から低い山見れば、低い山はやつぱり低い……」

「誰が歌を唱へといひましたッ、唱つては不可ないといつてるんですッ」

漸やく先生の一喝に會つて、二人の茶目も静まりました、マーベル

先生は、白墨を執つて、黒板に数字を書きます。

「九に七を掛けて何個になります」

デブ君は手をあげました。

「分りました」

「言つて御覽なさい」

「九に七をかければ、七九、四十二です」

「そんな掛け方がありますか、七九、六十三です、……夫では三に四を乗けるといくつになります」

今度はノツボ君が手を挙げました。

「ノツボさん、言つて御覽なさい」

「三に四を乗けると、三四、二十二になります」

マーベル女教師は可笑しいのを堪へるやうな顔で、

「さうぢやありません、三四の十二です、それでは八に三を乗けたらいくつですか……」

後からくと問題を出して、生徒に教えて居ます、其の隙にノツポは後を向いて、一生懸命本を讀んで居るデブ君の、太鼓のやうに大きな腹を、帽子のピンをぬいて、チヨイと突付いた、

「アイタツ……」見ると前のノツポが態とすまして居るから、さては此奴の所爲だと思つたから、讀んで居た本をクルくと丸めると、後から、ノツポの頭をポカリと殴り付けました。

「オヤツ、殴つたな」ノツポも同じく本を丸めると、向かへてデブ君に打つてかゝりました、互ひに三ツ四ツ殴り合つて居たかと思ふと、デブ君の手が外れて、持つて居た本は、礫の如く飛んで来て、今、黒板へ向つて數學の式を書いて居た、マーベル先生の脊中へ、ドシンと當りました、

マーベル先生は、驚ろいて振り返ると、本が落ちて居ます、キツと睨みつけて、本を拾ひとり、

「誰です、今本を投つたのは、誰ですッ」先生が怖い顔をして居るので、誰も、口を利く生徒はありません、マーベル先生は、猶も聲を尖らして、

「誰です、お言ひなさい、誰ですッ……言はなければ皆な罰にしますよ……」本の裏面を見ると、其所に『デブ所有』と書いてあります。

デブ君は、知らん顔をして、態と温順さうにして居ます。

「分りました、先生は、誰がしたのか皆な知つて居ます——デブさんあなたでせう、本を投げたのは」

「イエ、私ちやありません」

「私でなければ、算術の本を、お出しなさい、あなたは持つて居ますか」

デブ君は慌て、抽斗を開けたり閉たりして、目を白黒して居ます。

「ソレ御覧なさい、無いでせう、あなたが投げた本は此處にあります

どうして本を投げたのですか」

「あの、ノツポの奴が……」

「奴とは何です」

「だつて、私の頭を先に打つたんですもの」

「ノツポさん、何故打つたんです」

「何にもしないのに、デブさんが先に私の頭を打つたんです」

「さうぢやありません、私の腹をピンで突いたのです」

「二人とも不可ませぬ、けれども、先に悪戯をしたのがノツポさんですから、あなたは罰にします、此方へお出なさい」

マーベル先生は教壇から降りて来た、ノツポをお座から出して生徒

の外套や帽子のかゝつて居る廊下へ佇たせました、三角な細長い帽子を頭に被せて、

「サア、茲に立つて在つしやい、此の帽子を脱つちや不可ませんよ、

温順くして居ないと、時間が来ても家へ返しませんよ」

其儘教室へ入つて、又黑板にチョークを走らせながら、生徒達に教え初めました。

茲にマーベル嬢の婚約者に、某會社に勤めて居る若い紳士があります、紳士は、或用件の爲めに、某地へ出張して居て、歸つて來ると、マーベルさんからの手紙です、命によつて、已むなくグリーンカンツリ

一小學へ轉任したが、いづれ四五日中には、一旦歸つて、すべての殘務や、荷物なども引取りに行く、其節、是非、貴女にもお目にかゝつて、お別れを告げたい、といふのであつた、併し、若紳士は此の手紙を見ると、マーベルが歸つて來る、四五日を、待つて居るのが苦痛でした、況して自分も他に出張して居たので、假令半月でも相見なかつたのであるから、何となくマーベルに會ひたくて、直ぐに會社の自動車走らして、十二三里の道を、はるくくと、カンツリー小學をさして出かけたのであります。

ノツボ君は、廊下に立たされたが、マーベル先生の姿が教場内へ消

えると、おとなしく帽子を被つて立つてなぞは居りません。

「是からが此方のものだ、デブの野郎覚えて居ろ、今にいたづらをしてやるから……」帽子を脱つて、ポケットを探して居たが、紙が見付かりました。

「占めく、是だく」と忽ち口の中に丸め込んで、グチャクと噛みつぶすと、手にとつて、教場の入口くやつて来た、見ると、デブの奴、頻りに本を讀んで居ます。

「此ン畜生ッ」紙礫をビューツと投げると、夫が飛んで来て、ペタリとデブ君の顔へ喰付いた、デブ君は不意を打たれて飛上つた、

「アツ、いてえやく」手をやつて、其紙礫をとると、此方も負けて

は居ない、同じくカーぱいに投げ返す、ペタリツと今度は、ノツポの顔へ喰付いた。

「ヤツ、投げ返しやアがつたな、よしッ……」

何か宜いものはないかしらと、ノツポ君廊下を探すと、生徒の外套がズラリとぶら下つて居る、其の外套のポケットへ手を入れると、

「有つたぞく」とニヤク笑ひながら引出したのはデブさんの辨當包みです、小さい風呂敷を解いて見ると、中から食パンが一斤出た、其のパンには、葡萄のジャムが、宛然お味噌のやうに、澤山付いて居ます、ノツポ君は、其パンを取上げて、一口、ムシヤクと食べて、
「ア、美味いく、此んな美味いものを、一人で食べちや惜い、一ツ

デブちゃんにも投げ付けてやらう、ドツコイショ……」
又入口へ来て、様子を窺ふと、デブさんはそんな事とは知らない、
本を讀んで居ます。

「此のデブめツ」とパンを投げ付けました。

飛んで来たパンは、デブちゃんの顔へ當つたが、パンが割れて、中
の柔らかいお味噌のやうなジャムだけが、デブさんの横ツ面へ、一ぱ
いに喰付きました。

デブさんは泣ッ面をして、

「アツ、痛えや〜〜」といひながら、手をやつて見ると、何ぞ圖
らん、夫が自分の一番好きなジャムですから、我を忘れて、ニヤリニ

ヤリと笑ひながらムシヤ〜と食べ初めました。

教壇のマーベルさんが夫を見付けて、

「デブさん、何の事です、早く顔を洗つて在つしやい、顔に付いたジ
ヤムをとつて食べるものがありますか、早く洗つていらつしやい」
デブさんは澁々顔を洗ひに行きました。

マーベル先生は、ノツボ君を猶一層いましめやうと思つて、廊下へ
出やうとして顔を出すと、ハツと驚ろいて顔を赧めました、夫は、他
でもない、婚約者たる若紳士が、マーベルさんのところへ訪ねて来て
今、教壇へ入らうとして居たのでした。

「アラ、何時入しつたんです」

「今、たつた今來たばかりです、彼の手紙を見て」

「ビックリなすつたでせう」

「ビックリよりは、遠くなつたので、ガツカリしましたよ」

「本當ね、妾も、随分つまらないと思つたんです」

「入つても可いの」

「だつて教室は困るわ」

「何所で咄さう」

「何所ツて、妾の室が其所です」

「さうかへ、其所へ行かうか」

「チヨイト、生徒に問題だけ出して行きますわ」

マーベルさんが教室へ歸つて来て、問題を出して、直ぐに若紳士と自分の室へ入りました。

夫を見て居たノツボ君は踊り出して喜こんだ、

「ヤア、をかしいな、女と男と豆煎り、女と男とマーメイリツ」

踊りながら教室へ入つて来ると、ポールドの前に立つて、チヨークをストラ〜と走らせて、繪を書きました、其の繪が、男と女とが、鼻と鼻とを突合せて、キツスをして居るところです、さうして其の繪の下へ『女と男と豆煎り、をかちい〜』といふ字を書き添えました、其の繪と字を見ると、教室に居た生徒が、一度に拍手して、ワイ〜囃し立てました。

其聲を聞き付けて、何事が起つたのかと思つて、マーベル先生は、教室へ歸つて來ました。

「どうしたんです、何を笑つたんです、先生がチヨイと姿を見せない
と皆さんは怠けるんですね、そんな事ですと、次の時間に遊ばせま
せんよ、どうしたんです」

といひながら教壇に上らうとすると、黒板の變な繪が目に入りました
是にはマーベル先生も餘程慌てたやうでした。

「ダ、誰です、誰です此んなイタヅラをしたのは、誰です此んなも
のを書いたのは」

マーベル先生の權幕がひどいので、一人の生徒はいひました。

「ノツポです」

「え、ノツポさんです……ノツポさんツ」

ノツポ君は頭を抱えて、小さくなつて居ます。

マーベル先生は、悲しさうな聲になつて、

「本當に、あなたのイタヅラには呆れましたね、まだ教室へ入る事を
許しはしなかつたでせう、先生の許しを受けないのに、教室へ入つ
たりなんぞして、どうしてさう言ふ事がきかれないんです……」

叱つて居る入口から例の若紳士は顔を出して、

「マーベルさん、まだ話があるんですよ」

マーベルは當惑の色をして。

「だつて、是を御覺なさい、是を、ね、一旦、歸つて下さいな」
紳士も此のポンチ繪には、ギョツとして戸外へ出て行きました。
時間の振鈴が鳴り渡つて居ます。

マーベル先生は、仕方がないといったやうな顔で、

「サア、モウ時間ですから、外へ出てお遊びなさい、デブさんも、ノ
ツボさんも、あんまり騒ぎ廻つて喧嘩しては不可ませんよ、早く入
つしやい」

許しを受けて、生徒は、列を組んで、戸外へゾロ／＼と出て行きました。

三

校庭に出た生徒等は、籠から出された雛鳥のやうに、嬉々として遊
び戯むれて居ります、中に、快くないのはデブ君です、先刻教室に
居る時、辨當のパンを食べられた其上に、ジャムを顔へ投げつけられ
た恨みがありますから、どうかして、その恨みを晴したいものと思つ
て居ました。

ノツボ君は、至極のんきな生徒ですから、そんなにデブ君が怒つて
居るとは氣が付かない。

「オイ、デブちゃん、大きな目高が居るから、拗つて遊ぼうや」

「ウン、目高をとらう」

デブ君も、直ぐに返事をして、川の邊まで来ました、川は田舎でも一寸珍らしい大きいもので、流れも可なり急です。

「デブちゃん、此所から下りて行かうか」

「さうだね、此方の方が宜いよ」

「だつて、其方は危ないよ」

「大丈夫だよ」

「ウン危ないよ」

「大丈夫だつてのに」

「だめだよ」

押問答をして居る中に、デブ君は、隙を見て、ノツポの後から突き飛ばしました、

「アツ、何をするんだい」といふ間もなく、川の邊の急勾配になつて居るところを、後ろから押されたので、ドッパと足をすべらかすとドブーンと川の中へ陥込んで了ひました。

ところが、可笑いのはデブちゃんです、ノツポだけを川の中へ落すつもりで突いたので、自分の身體が重いので、押した手の力で、自分の身體がフラ／＼して居るところへ、足をすべらしたので、是も同じく、ノツポ君の後から、ドブーンと水煙りを立て、川の中へ陥ち込みました。

他の生徒が、アレよく〜といふ中に、急流に押ながされて、川下の方へ出て行きます、二人は、生憎に、泳ぎを知らなかつたので、アツブ〜、浮いたり沈んだりしながら、すでに命さへ危なくなつて來ました。

「先生大變です、先生大變です」

と五六人の生徒は、マーベルのところへ駆けて來ました、

マーベルは驚ろき慌てながら、

「ドッ、どうしました」

「今、ノツボさんと、テブさんの二人が川へ落ちて死にさうです」

「え、川へおちて……」

マーベル先生は、矢のやうに、裳も軽く飛んで來ました、夫は高い橋の上です。

「先生、彼所へ流れて來ました、アレ〜、彼所です」

マーベル先生が川を見ると、テブさんとノツボさんの二人が、水流に押ながされて來ました、モウ、服をぬぐ暇も何ありません、橋の上から身をおどらせると、三丈もあらうといふ深い川の中へ、ドブーンと飛込みました。

少時は、二人を助ける爲めに、右に泳ぎ、左りに泳ぎ、漸くにして二人を押へ、援手を切つて、岸へ着きました、先づ川杭につかまらせて、自分が先に上へ昇り、二人を順に一人づゝあげました、

此の報知を生徒が、テブさんや、ノツボの家へもしたものですから親達は驚ろいて駈付けました、水を呑んでグツタリとして居る二人をか抱いて、我家へつれて行きます、

マーベル先生は、ビシヨ〜に濡れた服の儘、自分の室へ歸つて來ましたが、生憎なもので、まだ行李を待つて來てないので、着替がなかつたのです、

「仕方がない、寢衣を着て居やう、其内には乾くだらう」

と濡れて居る服をぬいで、學校の窓の、日當りに乾して、自分は、白い、雪のやうな寢衣に着かへました。

其所へ、此の騒ぎを聞いて、今、自働車で歸らうとした例の婚約者

が、マーベルの身を氣遣つて引返して來ました。

トン〜、トン〜、と、室の入口の扉を叩きます中からマーベル嬢がソツと開けて見ると、自分の愛人です。

「アラ、不可ないわよ、開けちや、今妾寢衣になつたところよ、困るわ開けられちや……」

「宜いぢやないか、開けて入れたつて、え、川へ入つたつて、身體は何でもなかつたの」

「え」

「生徒は助かつたの」

「生徒は助けましたわ」

「そりやよかつた、僕は、貴女がどうかしたかと思つて、どんなに心配したか知れないよ」

「有難う……いやよ、開けちや、ね、後生ですから行つて頂戴……」

「宜いぢやないか、何も婚約者の間だもの、夫に少しも疚しい事はありやしないよ」

「ですけども、妾、此んな扮装をして居て、羞かしいんですもの、ね、後生ですから行つて頂戴」

此の二人の押問答をスツカリ聞いて居れば、間違ひにもならなかつたのであるが、通りかゝつて見たのが校長です、ハ、ア、新教師のマーベル嬢が、男と悪戯て居る、怪しい事をして居ると早合點をしたものです。

のです。

「エヘン〜」

校長は、態と大きな咳ばらひをしました。

マーベルさんも、紳士も、驚ろいて見ると、校長が、むづかしい顔をして立つて居ます。

「マーベルさん、新教師のマーベルさん」と校長は、嚴そかに呼びました。

マーベルは、ハツとして、首を垂れながら、羞かしさうに出て來ました。

「御用ですか、校長」